仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ＆OOO&W&DCDfeatEVA NOVEL大戦COSMO

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー　フォーゼ＆ＯＯＯ＆amp;Ｗ＆amp;ＤＣＤｆｅａｔＥＶＡ　ＮＯＶＥＬ大戦ＣＯＳＭＯ

【Ｎコード】
Ｎ２５０４Ｙ

【作者名】
ＸＸ

【あらすじ】
三つの世界に運びいる三つの欲望
一つは破壊者の世界に運びいる世界の破壊
一つは全ての再構成の集まった世界に運びいる世界の終末と再生
一つはライダーのいない世界に運びいる世界のやり直し
それぞれの言葉は違えどそれは全て同じ意味を持った欲望
世界の破壊者と呼ばれたディケイド

二人で一人の仮面ライダーWと欲望の王オーズ
そして新たなる仮面ライダー、フォーゼ
三つの世界を守る４人の仮面ライダー、そして三つの世界に運び居る欲望が一つになった時、戦いは宇宙へと舞い上がる！

仮面ライダーディケイド（前書き）

自分の世界に辿り着いた門矢士、時折旅に出ては世界の物語を繋いでいた士達は、世界の崩壊を止める最後の旅にでる！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

仮面ライダーディケイド

後にＡＮＧＥＬ　ＡＴＴＡＣＫと呼ばれることになった仮面ライダー達とゼーレの戦いからはや４年の年月が流れた。
それぞれ、旅に出るもの、幸せを掴んだ物さまざまな道を選んでいるが、まさに平和そのものと言えよう。
光写真館
「帰ってきたか」
「僕としてはお宝も手に入ったし満足だけどね」
「あのなぁ…」
背景スクロールを見て呟く士、相変わらずな海東。そしてそんな海東に苦笑するユウスケ。自身の世界を手に入れたものの、気まぐれで旅を続けている光写真館一行。どうやら別の世界に旅に出て帰ってきたばかりのようだ
「でも、大樹さん。それって確か…」
祖父栄二郎の入れたコーヒーを持ってきた夏海が海東の持っている物を見て顔を真っ青にする
「そう！これはジュエルシードと言う、魔法少女には無くてはならない物だよ！まさに魂そのものだからね最高のお宝じゃないか！！」
「んな訳あるか！！」
あっけらかんと言い放つ海東に何故か片腕だけをＲＵクウガの物にして殴るのはユウスケだ。海東は撃沈。そしてその海東を無視して士達はジュエルシードを前に話し合いを始める
「で、どうする？もう一度行くとしてもまたあの世界に行けるかどうかは限らないぞ？」
「ですよね…。ああ！ごめんなさい！！皆さん！」
「まあでもあれが悪い訳だし最悪土下座でもいいし首刎ねて差し出しても良いしね」
「ユウスケ、それは過激すぎます。せめて半殺しで」

「譲歩になってないぞ?夏海」
士が中心になって話を進めるが、ユウスケの過激な案に結局まとまらなかった
「どうしたんですか?」
「いやあな、海東の奴が魂の塊であるジュエルシードとか言う宝石を盗んできてな」
「随分と大変な事になっていますね」
「ああ、そうなんだ…ってお前は!!」
「お久しぶりですね、ディケイド」
いきなり士の後ろに現れたのは管理者である紅渡だ。いつの間にか辺りは夜の町並みに変化している。そして渡は士に向き合い口を開く
「ディケイド、これからあなたには最期の旅に出てもらいます」
「最期の旅…だと?」
渡の発言に士は首を傾げた。確かディケイドの空間移動能力は健在の筈。一体何故、最後の旅なのかという訳だ
「言葉足らずでしたね。正確には崩壊の危機にさらされる世界への最後の旅です」
「つまりは、その世界を俺に救えという訳だな?」
「そういうことです」
微笑みながら渡は士の問いに答えた
「それでは朗報を期待していますよ。ディケイド」
そう言ってまた辺りは写真館に戻った
「士君、どうしたんですか?」
「いや、なんでもない(最後の旅だと?まさか世界の崩壊は収まったというのか?)」
夏海が心配そうに顔を近づけているが士は意識を思考の海に落としていた
「みんな居るかい?クッキーが焼けたよ…ってわわわ!!」
クッキーの入った皿を放り出してこけるのはこの家の主である光栄二郎。無論クッキーの皿は復活していた海東がキャッチしていたが。

そして背景ロールに激突した栄二郎。その衝撃で背景ロールの絵柄が変わる
「ディケイドの…紋章？」
「まさか…ディケイドの世界？」
世界の破壊者ディケイドディケイドの世界を巡り、その瞳は何を見るこれは、かつて世界の破壊者ディケイドと呼ばれた青年門矢士と門河テル。そして二人の仲間達の新たなる物語である…

仮面ライダーディケイド　ＦＩＮＡＬ　ＳＴＯＲＹ～ディケイドの世界～

人は何のために生きているのだろうか？俺はこの質問こそが人類の永遠の謎だと考えている
結論を言えば人は自分の為に生きている。他人なんかどうでもいい、自分さえよければいい、それが人間の本性だ
いくらきれいごとを並べようと、いくら人のためと言おうと結局は自己満足でしかない。しかもその善意は時に悪意に変わる。誰かは忘れたがこんなことを言った人も居る『一番たちの悪いのは善意だ』と。事実、アフリカの難民達を救うために送った物資だって、何かしらの災害で被害を受けた被災者に送った物資だって、たとえ善意だとしても当事者達が望んでいるものと違うのなら何の意味も無いだろう。役に立たないのだから
そういう押しつけの善意ならいらない。それは偽善だ、ただの自己満足だ。だからといって偽善を否定する訳でもない。だって人は皆

偽善者なのだから。
人は与えられた情報でしか物事を見ないし、感じようとも、考えようともしない。それは仕方ない事だ。俺だってそんな人間だ。あくまでも俺の考えだから批判は甘んじて受け入れよう。それもまた一つの意見なのだから、それによって自分の視野が広がればなおの事いい。新しい視点から物事を見る事が出来るのだから、新しい発見があるだろう。それもまた面白い
だから俺は人間を悲観しない。まあ、他人の事なんて知ったこっちゃないし、分かってやろうとも思わないが。人間は自分の本性を隠すから、分からない事だらけだ。些細な事で争いと起こす。まあ、人の歴史は争いの歴史なのだから、あながち間違っていないんだがそうそう、争いで思い出した。こう考えるとイジメだって無くなる事は無いだろう。どっかの馬鹿はいじめた方が一方的に悪いと言うがそれはおかしい。いじめられる方も悪い、だっていじめられるのはたいてい抵抗もしないし、やめての一言も言わない。言ったとしてもどうせ終わらないだろうが、だからといって暴力に頼るのもどうかと思う。結局、人は力を持てばそれを使いたがるから…だから原爆投下の悲劇が起こった。
さて、長ったらしく前置きをしたが、これは俺個人の意見として考えておいてほしい。いきなり地の文をやってくれと言われてとっさに思いついたのだからそこは勘弁してくれ
さて自己紹介といこうか、俺の名は門河テル。仮面ライダーディケイドだ。これでも１８歳と青春まっただ中の筈なのだが特に何も思う事は無い。逆に青春と言う言葉に嫌悪感を持っていたりする。まあ、そんな事はどうでも良い
え？授業はどうしたって？別につまらないから抜け出したんだ。日本の中でもトップクラスの進学率を誇るっていうから一部には無理を言わせて一緒に受験して、合格して通っているが、手応えが無さ過ぎる。兎に角、自分の限界を知りたかったから特進科を選んで受験したの言うのに、まったく持って限界が見えてこない。不思議な

物だ
今思うとこの国の最高学府だって手応えが無い。模試なんて常に合格判定Sだし、後は出席日数さえ確保しておけば問題無し。毎日が退屈過ぎる。特に何も起こらないし平和そのものだ。…逆に平和ボケしないか心配だが
「おーい！テル！！何辛気くさい顔してんだよ！」
「ああ、カイオとカズヒトか」
廊下で歩いていた俺に声をかけてきたのは、小学生からの友である、福沢カイオと吉山カズヒトだ。二人は普通科なので滅多に会わないのだが、俺が普通科の校舎に来てるからあったんだろ
「それにしても特進科のエースが普通科になんのようだよ？」
「何言ってんだ。どいつもこいつもガリ勉ばっかでつまらないんだよカズヒト。普通科の奴らの方が人間味があっていい」
「それって俺らが馬鹿ってことか？」
「よくわかったな、カイオ」
「お前な！！」
「冗談だ」
こいつらをからかった方がよっぽど楽しい。特進科のガリ勉共はまったく持って冗談が通用しないし、面白くない。休み時間でも教科書やら問題集やらを広げてる。あほらしい、そんなに必死になって特進科にいるなら、普通科でトップ争いをした方がよっぽど楽しいだろ…と俺は思う。ちなみにこの意見を一回口にしたのだがその後ハルカに切り刻まれるとこだった。いやー、冷や汗物だった
「でもってエンマとハルカは？」
とりあえず、一番親しい二人の所在を聞いてみる。先に答えたのはカズヒトだった
「あーっと、エンマは補習中で、光さんは職員室」
「エンマもここに進学したんなら頑張らないと留年だぜ？今までギリギリのところで進級してたけどさ」
「まあ、エンマは俺が無理言って此処に来させたからな」

カイオの言葉に苦笑しながら答える。あいつの幸運体質はどうでも良い所で発揮されるのが大抵だ

「おらお前ら！カズマサ様のお通りだ！道をあけろ！」

いきなり馬鹿が吠えてきた。どうも奥の方にいかにも成金の息子ですよと言った感じの男子生徒の姿が見える。あんな豚みたいな奴が廊下を歩いたらさぞかし迷惑だろう

「聞こえてるのか！」

「聞こえてない。聞こえない。馬鹿にかまうな馬鹿がうつる。これ、俺の考え」

「貴様！」

いきなり殴り掛かってくる馬鹿Ａをとりあえず鳩尾に一撃入れて黙らせた。何でおれはこうも面倒事にことあるごとに巻き込まれるのだろう。俺の平穏な日々はいつに？

「特進科では見かけないから普通科か。一体どんだけ威張ってるんだ？」

「何でも、国会議員の息子らしいぞ？」

「つまり親の七光りか」

呆れた。４年経てば国会議員なんて職を失うというのに。俺の記憶だと、今世間では解散総選挙の噂が流れてた筈だが

「来たぜ」

「あんなの廊下を歩いてたら迷惑この上ないな」

近くで見ると出来る事なら一生かかわり合いを持ちたくないような奴だ。顔みてるだけで苛ついてきた

「おい、道をあけろ！」

「断る。お前に指図される筋合いは無い」

どうやら取り巻きであろう馬鹿Ｂが言ってくるが適当にあしらっておくか。この手の馬鹿は関わりを持たない方が良い

「お前見かけないな？特進科の奴だな？」

「お前に答えて何になる。自分が損するような情報は流すつもりは無い」

無表情で会話をするのは得意中の得意だ。動揺なんて見せた瞬間に終わりだしな。にしてもテンプレート通りだな。ホント、不良とかには絡み方の教科書でもあるのか？

「どうなっても知らないからな？カズマサさまに歯向かった事を後悔すると良い」

「ならその逆も然り。俺を起こらせない方が得策だぜ？お前らも俺に関わって後悔するなよ？」

覚えてろ！と言いながら馬鹿Ｂはカズマサとか言う男子生徒の元に行く。どんだけテンプレート通りなんだよ。あほらしい

「おい、テル？」

「大丈夫だ。国会議員だかなんだか知らんが、俺の人脈を甘く見てもらっては困る」

実際個人的なつながりでなら天皇陛下だろうと、アメリカの大統領だろうと、国連事務総長だろうと、世界の要人達に繋がる人脈は持っている。どこまで使えるかどうかは試した事が無いので分からんが、情報は結構入ってくるので便利この上ない

ん？何か取り巻き共が何か取り出した？あれは…ガイアメモリだと？

「どうする？テル」

既にカイオはカイザギアを腰に巻いている。別に変身しなくたってこんな奴ら…

「いい。マスカレイドメモリ程度なら変身しなくても……」

既に馬鹿共はマスカレイドドーパントになっている。…後でユキタカに連絡しておいて実験台にしてもらうか…。こんな奴らは…

「生身でも勝てる！」

多分この時他人から見れば俺の瞳は紅と翠に輝いていただろう。俺が人について疑問に思い、そして軽蔑する理由の一つ

「お前！ば…化け物か！？」

この瞳を見た奴らはたいていそう言ってくる。だけどな…

「傍目から見ればお前らの方がよっぽど、化けもんだよ！！」

俺の右手に力が集まっていく、そして巨大な弾丸となり、あいつら

に照準を合わせる。俺が持つ、人の域を超えた力。その代償は自身の命
「天空の雄叫び、ルッジート・ディ・チェーリ！！」
周りに被害が出ないように、自分に負担がかからないように威力を最小限に押さえた一撃で、メモリブレイクを完了させる
「つっ…。やっぱり少し無茶したな…」
右手に激痛が奔った。よく見ると筋が切れてるし腕は変な方向に曲がっている、どうもあの戦いが終わってからから調子が悪い。さすがにレジェンドコンプリートを使ったのは拙かったかな？
「大丈夫かよ？」
「なんとかな。でも…大丈夫だ」
俺の力は二つ。時空制御と天候操作だ。何故そんな力があるのかは教えるつもりは無いが…。とりあえず、時空制御の力を腕にかけて傷を治す。ついでだからさっきの攻撃で壊れた箇所にも力を使って元通りに復元する、証拠隠滅完了！
「さてと、さっき気づいたんだが、別世界から来訪者が来てるようだな。…カイオ、ちょっと学校抜け出すから後よろｓ「いや、お前特進科だろ！？俺は普通科だ！」…わかったよ」
最後まで言う事が出来なかったので、とりあえず昼休みまでは授業に参加しよう。にしても、誰だろうな…妥当な線としては渡か剣崎か…大穴で士も考えられるな…

～～～

という訳で昼休みになった事だし、先生はうまく騙してから校門を出る。まあ、早退に関しては問題ないだろう。別に内申無くても試験で１００点それば問題ない。とりあえず、時間を潰すために行きつけの喫茶店に来たんだが…
「光写真館…ということは」
兎に角、入るかと思った矢先にドアが開き、中から見覚えのある男

女が出てくる
「お前は…門河!?」
門矢士。原点（オリジナル）の仮面ライダーディケイドある意味再開を楽しみにしていた男だ
それにしても、あいつらも気配を消すのが下手だな
「よっ、久しぶりだな士。だが、再開を喜んでいる暇はなさそうだ」
「のようだな」
俺達を囲むようにして現れたのはショッカー戦闘員だ。そういえば、何チャラショッカーとか言う組織があるってユキタカが言ってたな。とりあえずそんなことはどうでも良いので、デルタドライバーを腰に巻く。士や夏みかん、雄介のリイマジも既に経にｓん準備ＯＫか
「変身!」
［スタンニンバイ　コンプリート］
デルタに変身する。ディケイドは基本的に使わない。カードを使うのが面倒だからだ。本気で戦うときはディケイドを使うけどな
「ユウスケ!夏海!行くぞ!」
「「「変身!!」」」
［カメンライド　ディケイド!］
［かぁ～ぷ♪］
ディケイド、キバーラ、クウガ。世界の旅人達がその姿を見せた
「行くぜ…!」
俺は士達に、なによりも自分にそう言った

～～～

さて、なんとかあれを撃退した後、士達から事情を聞いてから学校に向かった。どうもこの世界での士の役割は俺達の通っている高校の教師らしい。さらに俺が所属している部活の顧問というおまけ付きで
「なあ門河、この万部って何なんだ?」

「万屋ってあるだろ？」
「ああ、何でも屋って奴だよな」
「万部はまさにそれだ。部活の助っ人や地域の人達からの依頼の解決…あげくの果てには臨時教員と多種多様だ」
「最後のにはツッコミを入れた方が良いのか？」
「臨時教員は極端な例だ。普通ならそんな依頼は来ない。でもってここが万部の部室だ」
普通科の校舎の一角にある今は使われていない古びた応接室。ここが万部の活動拠点だ
「ユキタカー、いるかー？」
とりあえず、殆ど此処に入り浸ってる生徒…俺の友達の一人である山谷ユキタカがいるかどうか見てみる。パソコンがあるってことは此処に居たな？
「あー、カイザギアの保守点検か。そういえば、ザビーゼクターとかどうした…成る程な」
忘れてた。ユキタカの奴、大の虫嫌いだった、虫見た瞬間にクロックアップレベルのスピードで逃げ出すから、カブト系のライダーシステムの点検は俺の役目なんだよ…
「というか、ここって本当に高校か？」
「一応な。というか万部が異常なだけだ。設計図さえ見てしまえばその機械を作り上げ管理することが出来るメカニック山谷ユキタカ、ダメダメのくせして幸運体質の門矢エンマ、異常な強さを持つ女剣士光ハルカ。後の二人は基調な普通福沢カイオと吉山カズヒトだ」
「確か部活の公認される条件は…部員が5名以上、顧問が居る事。だったな」
「あと部長が決定されている事。部活が出来てから一ヶ月以内、世代交代した場合は半月以内に決定する事だ」
とりあえず備品のコーヒーメーカーでコーヒーを煎れながら話を続ける
「さてと士、お前が来たって事はこの世界が崩壊に向かってるって

ことだよな?しかも管理者であった俺が対応出来ない程の」
「ああ、多分な」
「ということは心当たりはある。多分あいつの…」
俺が最後まで言い切る事は出来なかった。何故なら…
「テル君!あいつが!!」
エンマの乱入と、外からの爆発音。そして…
「出てこい、もう一人の俺…次はこの世界を破壊する!!」
黒き破壊者、仮面ライダーダークディケイドの襲来のせいだ
「ゼロ…あいつ!!士!エンマ!行くぞ!!」
俺はエンマと士にそう言って後部室を飛び出した。すぐにエンマと士は追いかけてくる
「カイオ君とカズヒト君は?」
「あいつらは自力で行くだろ!」
とにかく一般生徒に被害が行かないように食い止めないとな

FINAL　STORY～ディケイドの世界～

「なんでここにあいつが！」
「しらん！」
カイオとカズヒトはダークディケイドの姿を窓から確認するとすぐに外にでていた
［9…1…3…スタンニンバイ］
カイオはカイザフォンにコードを入力してエンターキーを押し、カイザフォンを閉じて右肩まで持って行く
「来い！ザビーゼクター！」
カズヒトはザビーゼクターを呼び出す
「「変身！！」」
［コンプリート］
［ヘンシン　チェンジワップス］
黄色いフォトンブラッドに包まれてカイオは仮面ライダーカイザに、カズヒトは仮面ライダーザビーに変身する
「ほう、カイザとザビーか」
「やっぱりあいつと同じ声で言われるとムカついてくる」
「カイオ落ち着け」
テルに似た相手を小馬鹿にした口調で話すダークディケイドに対して不快感をあらわにするカイザ。何やってんだか
「行くぜ…」
［レディ］
カイザはカイザブレイガンにミッションメモリーをセットして、ダークディケイドに切り掛かって行く
「ほっ、っと」
ダークディケイドはそれを軽く受け流しながら後ろに下がる
「カズヒト！」
「分かっている！」

ダークディケイドの背後にはクロックアップを使って移動したザビーの姿が、このまま挟み撃ちにしてしまおうという作戦だったようだが…
［アタックライド　セイリングジャンプ！］
「よっと！」
スカイライダーの能力ではるセイリングジャンプでダークディケイドは空を飛ぶ
「なっ…！！」
カイザはカイザブレイガンを後少しという所でザビーに振り下ろしそうになるが、そこはうまくこらえて構え直す
［ブラスターモード］
「このやろ！」
「我武者らに撃ってきた所で何もない」
カイザブレイガンをブラスターモードにしてダークディケイドを攻撃するが、攻撃されている筈のダークディケイドはそれを避けて行く
「カイオ！落ち着け！！校舎に被害が行く！！」
と言いつつもザビーは校舎に向かって行く流れ弾をクロックアップを使って落として行く
「これでおしまいか？」
ダークディケイドはカイザに向かってそう問いかける
［アタックライド　ブラスト！］
「なら今度はこちらの番だ」
ダークディケイドブラストがライドブッカーガンモードから放たれる
「っ…！？」
成す術も無く攻撃を受けるカイザ。これで終わりか…と思った時
「カイオ君！大地の重力、グラヴィダ・デッラ・テラ！！」
いきなり聞こえてきた声と共に、いくつもの星が現れてその重力で弾が全て引き寄せられた
「エンマ！？」
「無茶するからだよ？」

「煩い！！」
［エクシードチャージ］
エンマはカイザに駆け寄るがカイザはそれを顧みずにカイザフォンのエンターを押す
「はっ！！」
「ぐっ」
カイザブレイガンから放たれた黄色の弾丸がダークディケイドを拘束する
「はぁあああああ！！」
そしてＸの字をした黄色いポインターと共にダークディケイドを切り裂く。カイザの必殺技の一つ、カイザスラッシュなのだが…
［アタックライド　インビジブル］
ダークディケイドはインビジブルでその姿を消してしまう
「なに！？」
［ファイナルアタックライド　カ・カ・カ・カイザ！］
「しまっ！？」
そして背後から放たれたのはダークディケイドのゴルドスマッシュ。いつの間にかカイザポインターを召還していたのだ
［アタックライド　コンファインベント！］
だが、その一撃は消されてしまう
「大丈夫かー？」
上空から現れたのはジェットスラッガーで飛行するデルタとフォームライド・ブレイドＪでカメンライドしたディケイドブレイドジャックフォームだ
「来たか、テル。それと原点の破壊者」
「へぇ、まだ俺も現役のようだな」
ダークディケイドの言葉に皮肉たっぷりに言うＤブレイドＪＦ。デルタは黙ったままだ
「今までつかずじまいだった決着を付けようぜ？そしてどっちが本物なのかをな！！」

［アタックライド　ブラスト！］
ダークディケイドはブッカーガンモードでデルタを撃つ
「黙ってろ」
だがその弾丸をデルタはデルタムーバーの弾丸で全て相殺した
「今だ、ライダースティング！！」
［ライダースティング］
「ぐおっ！？」
今まで蚊帳の外だったザビーがダークディケイドが油断している所に必殺技のライダースティングを炸裂させる
「お前には用はない！消えろ！！」
「がはっ！」
だが目立った一撃を与えられなかったようでザビーはダークディケイドに殴り飛ばされる。そのまま壁にぶつかって変身解除された
「相変わらず…か」
デルタはそう呟いた後、変身を解除した
「ゼロ、お前は何故そこまで本物偽物にこだわる。お前は俺の破壊本能の具現化した存在。それなら俺と同じだろうが」
「だからこそだ。俺の破壊本能は俺を生み出した存在すらも破壊したいと言う訳だ」
「そうかよ…なら」
テルはディケイドライバーを腰に装着する
「此処で…倒すのみ！変身！！」
［カメンライド　ディケイド！］
テルはディケイドに変身する
「士。お前は手を出すな」
「おいおい、客に向かってそれは無いだろうが。手伝わせてもらうぜ」
「…好きにしろ」
3人のディケイドはライドブッカーをソードモードにして構える
「うおおおお！！」

先に動いたのはDブレイドJF。空中からの一撃にダークディケイドは翻弄される
「そらよ！」
そこにディケイドの一撃が入る。だがそこは流石と言うべきか瞬時に反応してガードする
「後ろががら空きだ！！」
［エクシードチャージ］
だがそこにカイザがカイザポインターを足に取り付けダークディケイドにゴルドスマッシュを叩き込む
「ぐっ…」
［ファイナルアタックライド　ブ・ブ・ブ・ブレイド！］
「はぁあああああ！！」
そこにDブレイドJFのライトニングスラッシュが決まる
「馬鹿…」
だがディケイドは有利な状況にも関わらず一回ダークディケイドと距離を置く
「おい、テル！何やってんだ！！さっさとトドメを…」
カイザは最後まで言う事が出来ずに地面に叩き付けられた、と思ったら直ぐに宙を舞い、そして落とされる
「カイザ！？っどわ！？」
すぐにカイザに駆け寄ろうとしたディケイド（士）だったがいつの間にか宙を舞い、地面に落とされる
「弱い」
そしてディケイド（士）を踏みつけるようにして現れたのはダークディケイド。いつの間にかアタックライド・クロックアップを使ったのだろうか
「世界の破壊者と聞いていたからな。どんな物かと楽しみにしていたがこのざまか」
「が…あ…！」
「死ね」

「君がね」
［ファイナルアタックライド　ディ・ディ・ディ・ディ・ディエンド！］
エンマの変身したディエンドのディメンションシュートが放たれ、
辺りは煙で覆い尽くされる
「くっ！？」
ダークディケイドが煙を払ったときにはそこにはテルの変身したデ
ィケイドしかいない
「お前は残ったのか？」
「最後までやっとかないと気が済まないからな」
「確かにな」
［［ファイナルアタックライド］］
行なわれるのは必殺技のぶつかり合い
［ディ・ディ・ディ・ディケイド！］　［ダ・ダ・ダ・ダークディ
ケイド！］
「「はぁあああああああ！！」」
最近は顔を合わせればこれで終わらせる二人だ。そして結果は…
「っと」
「っ…」
引き分け。ダークディケイドはすぐにオーロラを使って姿を消す
「ちっ、やっぱりガタきてるか？」
ディケイドは膝をついて荒い呼吸をしている
「とりあえず、行くか」
ディケイドは変身を解除してすぐに立ち上がると大騒ぎする生徒と
教職員達を尻目に学校を後にした

～～～

テルの自宅
「…で、此処に来たってこと？」
「そう言う事…」

玄関には仁王立ちしている少女とそれに弱気な笑みで会話をするエンマという不思議な構図が出来上がっていた
「まったく。何でこう、兄さんは巻き込まれ体質なんだろう…良いわ。エンマさん、怪我人はお兄ちゃんの部屋に放り込んどいて」
「ごめんね。ありがとう、サヨちゃん」
サヨ、それが少女の名のようだ。若干テルの弟であるコウガに顔立ちが似ているが、そこは気にしないことに…することも出来ないようだ
「ただいま」
「あ、兄さんお帰り」
テルが帰って来たからだ。カイオ、カズヒト、エンマの荷物を持って
「ごめん、テル君」
「別に」
エンマは自分のバックを受け取った後、二階に上がった
「悪いな、サヨ。あ、救急箱出しといてくれ」
「わかったわ」
テルは一回洗面所に言って律儀に手を洗ってうがいをした後、サヨから救急箱を受け取って自分の部屋のある二階に上がった
「さてと、大丈夫か？お前ら」
「背中打った」
「体の節々が痛い…」
「俺は大丈夫だ」
とりあえず、ボロボロになっているカズヒトとカイオに手当をした後、士が話しかけてきた
「なあ門河」
「ん？」
「お前さっき俺の破壊本能から生まれたって言ってたよな」
「まあ、それに近い事は言ったな」
「それってなんなんだ？」
「話しておくか…」

テルは一息置いた後口を開いた
「門河家は代々、常人ではあり得ない運動神経、もしくは頭脳を持っている。そしてそれは生まれつき決まっていて、大抵は隔世遺伝という形で受け継がれる」
「つまり、じいさんが運動神経抜群だったら自分も運動神経が良いってこと。という事は親父さんは頭がいいってことだな？」
「そういうことだ。俺のじいさんは運動神経が高かったから本来なら親父は頭脳明晰の筈だった…が」
「が？」
カイオがテルの言葉の切り方に違和感を感じて会話に入ってきた。ちなみにテルの境遇について知っているのはテルの親族とハルカ、エンマだけである。そのためカイオとカズヒトは聞き耳を立てていた
「親父にはそう言う能力が無かった。それは何を意味するか、答えはこれだ」
テルは自身の瞳を紅と翠のオッドアイに変えた
「隔世遺伝がさらに隔世遺伝を起こして、周りに回って俺に影響したんだ。だから俺には頭脳も運動神経もあるんだ」
「だから成績は常時オール5、運動神経もプロ並みなのか」
カズヒトは合点がいったらしく手を叩いた
「まあ、デメリットもあるがな」
「超巻き込まれ体質と不幸体質だよね」
「その通りだ、エンマ。ついでに言うが、この状況下だと俺の不幸体質はエンマの幸運体質で相殺されている」
「でもって、コウガが運動神経を、サヨちゃんが頭脳を持ってるのよね」
「ハルカか」
話の途中で入ってきたのは漆黒の長い髪に日本刀を腰に下げた少女、光ハルカ。テルの幼馴染みであり、何かと関係を噂されるが真相は不明。ちなみにテルに言わせると異常な強さを誇る女剣士らしいが
「そういえばサヨって、俺にも小夜っていう妹がいるんだが…」

「へー。サヨは俺の妹だ。ちなみに今は此処にいないがコウガっていう弟もいる。ちなみにコウガとサヨは双子だ」
士の問いかけに意外だなといった表情でテルは話だ。つまり双子の兄妹はコウガが運動神経を、サヨが頭脳をそれぞれ持って行ったらしい
「それにしても、ユキタカの奴はどこ行ったのかしら？」
「そういえば見かけないね」
ハルカとエンマはまったく姿を見せない万部の部員の所在について話し合ってたが…
「そういえば、アストロスイッチの調整が終わったから実験してくるとか言って、コウガのとこにいったんだっけな」
テルが所在を思い出したらしい
「ということは戻ってこないね」
エンマが分かり切っていることを言った後、士を除いた一同はため息。そして此処にはいないテルの弟、コウガに同情していたのだった
「で、話を戻すけど、俺の特殊能力もそんなイレギュラーな事例によって世界と反発して生まれたんだ。士達はアスラクラインの世界にいったか？」
「ああ。一応な」
そう言って士が懐から取り出したのは黒の拳撃とかかれたアタックライドのカードだった
「ＯＫ、それがあるなら話は早い。そこでの悪魔の魔力の源はなんだ？」
「世界との摩擦…そうか！」
「ああ。俺の力は世界との摩擦によって自身の命と引き換えに放たれてるんだ。俺の目算だと、俺の寿命は持ってあと６０年かな？」
「充分だと思うけど…」
「実際はガンダム００の世界でいろいろあったからまだ大丈夫なんだがな」
とりあえず、ここで話は一段落したのかハルカがサヨから受け取っ

たらしいコーヒーをすする
「ん、うまいな」
士はその味に目を丸くした
「さてと、それでもってこの後なんだが、ゼロの奴がどう動くかで変わって行くんだけど…「兄さん！」…どうした？サヨ」
「それが、いきなり玄関におっかない人達が！！」
「ん？」
サヨが言う通りに外の除いてみると、妙におっかない風貌の男達がいた。しかもそれを仕切っているのは…
「げ、あの糞デブかよ」
テルが啖呵を切った相手である国会議員の息子カズマサだった
「クッダラねえ。…あいつらオルフェノクとワームか」
呆れた口調で悪態をつきつつ外を見ているのと男達がオルフェノクとワームになったのだ
「テル、俺達にやらせてくれ」
カイオは既に変身準備万端になっている。カズヒトもザビーブレスレットの調子を確かめていた
「…！此処は頼んだ。あいつが来た。士、行くぞ」
「ああ」
テルは目を紅と翠のオッドアイに変えると空間の断層を作り、士と共に消えて行った
「いくぜ、カズヒト」
「オーライ」
［9…3…1…スタンニンバイ］
「「変身！！」」
［コンプリート］
［ヘンシン　チェンジワップス］
窓を開けて屋根の上に飛び出すと、二人はそれぞれの変身ツールを使ってカイザとザビーに変身する
「使って見るか」

そしてカイザの左腕にはリストウォッチ型のツール、カイザアクセルがあった。ちなみにファイズアクセルの色違いである
「先に行ってる」
［クロックアップ］
ザビーはクロックアップで高速移動空間に入るとワーム達に攻撃を仕掛けて行った
「俺もいくか」
カイザアクセルに取り付けられたアクセルメモリーをカイザフォンにセットする
［コンプリート］
胸部アーマーが四方向に展開する。フォトンストリームが銀色になり、複眼は黄色になる。これこそカイザの超高速形態、カイザアクセルフォームだ
［レディ］
ミッションメモリーをカイザブレイガンにセットして、カイザアクセルのスタータースイッチを押す。さらにカイザフォンのエンターを押した
［スタートアップ］　［エクシードチャージ］
「お前らなんかに…」
カイザブレイガンから放たれた光弾が次々とオルフェノク、ワーム関係無しに拘束して行く
「負ける訳ねえんだよ！」
「同感。ライダースティング！」
［ライダースティング］
ザビーはライダースティングを発動させ、カイザが取りこぼしたワームを次々と倒して行く
「はぁあああああ！！」
カイザＡＦは次々とオルフェノクとワームを切り裂いて行く
［３…２…１…タイムアウト　リフォメーション］
［クロックオーバー］

カイザＡＦは通常フォームに戻り、ザビーはクロックアップが終了する
カイザアクセルフォームのアクセルカイザスラッシュとザビーのライダースティング、二つの必殺技によりあっという間にオルフェノクとワームは殲滅完了。後は首謀者のカズマサだけになる
「くそ…お前らなんかに！！」
［コックローチ］
カズマサは苦し紛れにコックローチドーパントに変身して逃げようとするが…
［エクシードチャージ］
「はっ！」
カイザポインターから放たれたポインターがコックローチドーパントを拘束する
「はぁあああ！！」
そしてゴルドスマッシュが炸裂。だが、耐久性能をあげているのか、メモリブレイクはされない
「ライダースティング！」
［ライダースティング］
「そんなぁあああああ！？」
そこにザビーのライダースティングが炸裂し、コックローチドーパントはメモリブレイクされた
「さてと、警察呼ぶか」
「だな」
メモリブレイクされて意識を失っているカズマサをサヨから借りたビニールロープで縛り上げた後、サヨが警察に連絡し、カズマサは警察に御用になった
「テル達の所に行くか？」
「だよなぁ…」
カイオはサイドバッシャー、カズヒトはマシンゼクトロンを呼び出すと、それに乗り当ても無く走り出した

〜〜〜

町外れのとある廃工場

「ゼロ…」

「よう、テル。それに原点（オリジナル）の破壊者」

テルと同じようで少し違う笑いを浮かべるゼロ。テルと士は空間の断層を通ってここに来た

「成る程…ここなら周りに被害がでることもない…か」

「ああ。わざわざ苦労して探してやったんだ。さあ、楽しもうぜ！」

「ここで…全部終わらせる！」

士、ゼロ、テルの三人は自分の変身ツール…ディケイドライバーもしくはダークディケイドライバーを腰に巻く

［［［カメンライド］］］

［［「変身！！」］］

［［［ディケイド！］］］　［ダークディケイド！］

ディケイドとダークディケイドはそれぞれ自身の武器を構える。士の変身するディケイドはさらにケータッチを取り出した

［クウガ　アギト　リュウキ　ファイズ　ブレイド　ヒビキ　カブト　デンオウ　キバ　ダブル　オーズ　フォーゼ…ファイナルカメンライド　ディケイド！！］

ヒストリーオーナメントにフォーゼのカードが足された、ディケイドコンプリートフォームになる

「さあ、始めようぜ」

ディケイドCFもライドブッカーをソードモードにして構えた

全てを破壊し、全てを繋げ！

「うぉおおおおお！！」
「ふん！」
ディケイドＣＦがダークディケイドに突っ込むが、ダークディケイドはそれを難なく避ける。そしてディケイドＣＦに攻撃を仕掛けようとした…が
［カメンライド　オーズ！］
「させるかよ！」
「くっ！？」
オーズに変身（カメンライド）したディケイドがバッタレッグで跳躍し、トラクローで切りつけた
「数の上では不利…ということか…ならば！」
［アタックライド　イリュージョン］
ダークディケイドはイリュージョンのカードを使い２人の分身を作り出す
「はっ！」
「やっ！！」
「とお！！」
「ってどわ！？」
３人のダークディケイドの連続攻撃をくらい、ディケイドＣＦは後ろに後退していく
［フォームライド　オーズ！ガタキリバ！］
「分身出来るコンボがあるってことを忘れんなよ！！」
５０体に分身したＤオーズＧＫＢが数の暴力で一気に３人のダークディケイドを蹴散らしてディケイドＣＦを助け出す
「悪い、門河」
「別に」
素っ気なくディケイドＣＦの謝罪に返すとＤオーズＧＫＢは新たな

カードをセットする
［フォームライド　オーズ！タジャドル！］
Ｄオーズはタジャドルコンボになり、クジャクウイングで飛翔する
「くっ！」
［アタックライド　セイリングジャンプ！］
ダークディケイドはアタックライドの力で空を飛び始める
「はっ！！」
「この！！」
［アタックライド　ブラスト！］
ＤオーズＴＪＤはタジャスピナーの光弾で、ダークディケイドはブラストの弾丸で銃撃戦を繰り広げて行く
「こんにゃろ！！」
「ふん！」
「はっ！！」
「ぐわっ！？」
ディケイドＣＦは地上に残っているダークディケイド２人を相手に接近戦を行なっていく。だが、数の上ではダークディケイドの方が有利。一方を相手にしているともう一方が背後から斬りつけてくる
「このままじゃ…ラチ開かねえな…」
［リュウキ！カメンライド　サバイブ］
ディケイドＣＦはケータッチの龍騎の紋章をタッチし、龍騎ＳＶを召還する
［ファイナルアタックライド　リュ・リュ・リュ・リュウキ！］
「はっはあっ！！」
［［アタックライド　スラッシュ！］］
ディケイドＣＦと龍騎ＳＶのバーニングセイバーとダークディケイドのスラッシュが激突。そのまま相殺される
「なっ…！？」
［アタックライド　ブラスト！］
驚きで動けない所にダークディケイドの追撃が決まった

「ちっ…新しい力…使ってみるか！」
［アタックライド　クロノケンゲキ！］
ディケイドＣＦがディケイドライバーに装填したのは、アスラクラインの世界で手に入れたカード。音声と共にディケイドＣＦの銀色の部分が全て漆黒に変わる
「はぁぁぁぁ…」
そして右手に魔法陣が展開され、右手に力が溜まって行く
「はぁあああああああああ！！」
放たれるのは機巧魔神黒鐵（アスラ・マキーナくろがね）の能力である重力球。そしてその一撃は…
「ぐわぁあああああああ！！」
一体だけではあるものの命中し、当たったダークディケイドは消滅する
「これで2対2だぜ？」
ディケイドＣＦはライドブッカー・ソードモードを再び構えると、残ったもう一人のダークディケイドに言い放った

「くそっ…！！」
「よそ見してる暇無いぜ、ゼロ！！」
一方、ＤオーズＴＪＤとダークディケイドの本体は空中戦及び銃撃戦を続行中だった。が、ダークディケイドの一瞬の隙をついてクジャク光弾がダークディケイドに襲いかかる
「くっ！！」
ダークディケイドはライドブッカーの弾丸で迎撃するが数が多く、さらに追加されたタジャスピナーの攻撃を喰らってしまう
「流石は俺の本人格。強さは格別か…」
「何言ってやがる…お前だって俺だろうが」
「それもそうだったな。…いいだろう、俺の本気を見せてやる」
そういってダークディケイドが取り出したのは黒色のケータッチ
「それか…お前の」
「その通りだ」

［ミラージュアギト　リュウガ　オーガ　カリス　カブキ　コーカサス　ネガデンオウ　ダークキバ　エターナル　ポセイドン　コア…ファイナルカメンライド　ダークディケイド！］
ダークディケイドの姿が変わる。基本カラーはそのままだが、ヒストリーオーナメントが装備され、そこにはダークライダー達のライダーカードが配されている。頭部のディケイドクラウンには現在のダークディケイドの状態のライダーカードが出現、その後ダークディケイドライバーのバックル部を外してケータッチをセットしバックル部を右腰に装着した
仮面ライダーダークディケイドコンプリートフォーム。全ての世界のダークライダーの力を手に入れた、ダークディケイドの最強形態だ
「いくぞ…！」
「っ…！？」
ほんの一瞬で距離を詰めたダークディケイドＣＦはＤオーズＴＪＤをライドブッカーで一閃する。一気に地面にたたき落とされたＤオーズＴＪＤはそのままディケイドに戻る
「門河！！」
「っ…士か」
そこにダークディケイドの分身が消えたためにフリーとなったディケイドＣＦが走ってくる
「あれは…」
「見れば分かるだろ…？」
「今度は負けんぞ。本調子でないお前等、雑作も無い」
「だろうな…」
「どういうとこだ？本調子じゃないって…」
「士、聞け。あいつは普通のコンプリートフォームじゃ倒せない」
ダークディケイドＣＦの言葉にディケイドＣＦは疑問を感じてディケイドに話しかけたが、ディケイドはそれを遮って話を始めた
「あれは…ダークディケイドの最強フォームだ。通常状態でも高いスペックを持っているダークライダーがさらにパワーアップしたん

だ…言いたい事は分かったな？」
「ああ、大体分かった」
ディケイドCFはケータッチを取り外すと、ケータッチに装填していたカードを取り替える
［アメイジングアルティメット　ゴットトリニティ　フォースサバイブ　ブースターブラスター　ロイヤルキング　ショウグン　マスター　スーパークライマックス　ラストエンペラー　ディザイアエクストリーム　タトバリング…ファイナルフォームカメンアタックライド　ディ・ディ・ディ・ディケイド！］
金色のボディにマゼンタ色のマント。真・最強フォームのライダーカードが配されたヒストリーオーナメント。仮面ライダーディケイドの真・最強フォーム、パーフェクトコンプリートフォーム、ここに降臨
「ハァ…ハァ…。悪い、ここで限界みたいだ…」
ディケイドPCFが強化したのと同時にディケイドは倒れ変身解除された
「ああ、ここからは俺に任せろ」
「ふん。お前には別に何にも用はないが、邪魔をするなら消えてもらおうか」
どちらも相変わらずライドブッカーソードモードを構えると…
「「うぉおおおおおお！！」」
ぶつかり合った

～～～

力の使い過ぎか…？こんな所で倒れるとはな…まだまだ鍛え方が甘かったか…。ん？起き上がれない…だと？
ちっ、まさかここまでガタが来てたとは自分でもびっくりだ。こんな状態で戦ってたんだから今更ながら自分の異常性に感服する
自分の事だろう？と思うだろう。だが、自分のことは自分が一番分

からないからな…人が独りでは行きて行けないのはそう言う事だ。
そしてこんな状況で何故人について語っているのかも分からん
とりあえず、うつ伏せの間までもあれなので仰向けになろうとしたが、体中に痛みが走ってきたので止めておこう。お、首くらいなら上がるか
「「うぉおおおおおお!!」」
…頭をあげてみたら、ゼロと士が対峙していた。ダークディケイドCFとディケイドPCF。スペック上はパーフェクトの方が上だけど…ゼロは俺の同位体だからな…どこまで食い下がって行くのやら…
「はっ!!」
「っ!?」
「おりゃあ!!」
お、士もだいぶ強くなってんな。だけど、ゼロも流石と言えば流石だ、士の斬撃を紙一重で避けてやがる
俺個人としては士がゼロの奴を倒してくれれば何とかなると踏んでいる。実際、ここまで俺が疲労しているのも奴と分離してから(・・・・・)…だからな

〜〜〜

「この程度か!真・最強フォームとやらも!!」
「なわけねえだろ!!」
ダークディケイドCFとディケイドPCFの刃が何度も混じり合う。その度にキンという硬質かつ鋭い音と火花が散る
「「アタックライド　スラッシュ!」」
「おりゃあ!!」
「ふん!!」
強化された刃同士がぶつかり合う。しばらく鍔迫り合いに移行した後、すぐに間合いをとり構え直す
「次は銃撃戦と洒落込むか?」

「望む所だ！」
［［アタックライド　ブラスト！］］
次はライドブッカーガンモードから放たれる弾丸での銃撃戦。どちらも的確に相手を狙い、そして弾丸同士がぶつかり合い相殺される。時折相殺されなかった弾が両者共に襲いかかってくるが、うまく転がって回避した後またも弾を放つ
力量は互角、力も互角。こうなると勝敗を決めるのは変身者の潜在能力と戦闘経験で養われた実力のみ
「ふん！！」
「なっ…？」
いきなりダークディケイドＣＦがライドブッカーをソードモードにしたかと思うとそれを何も無い空間に一閃。すると空間に裂け目が現れ一気に間合いが詰められる
「しまっ…！」
「遅い！！」
至近距離からの斬撃。今までの拮抗した戦いが嘘のようにディケイドＰＣＦはされるがままにされ吹っ飛ばされる
「くっ…そ…」
すぐに起き上がって体制を立て直そうとするが…
「ふっ！」
またも空間の断層で瞬間的に移動したダークディケイドＣＦによって斬りつけられる
「がっ…！」
「弱いな」
「が…あ…」
そのままダークディケイドＣＦはディケイドＰＣＦを踏みつける
「これが、真・最強フォームの力…か？弱過ぎるな」
そしてダークディケイドＣＦはライドブッカーＳＭを振り上げると…
「さらばだ」
振り下ろそうとした。だがその行動はどこからとも無く飛んできた

シアン色の光弾によって阻まれる
「そりゃあ、お前やテル君からみたら弱いだろうし、僕たちの攻撃も蚊が刺す程度かもしれないね」
「だからといってそれで諦める訳には行かないけどね」
「お前ら…」
立っていたのはエンマと海東。ある意味ディケイド二人の相棒的な存在だった
「ディエンドか…何故ここが分かったのかは追求しない事にしよう。だが！お前らを生きて返す訳には行かない！」
「なら、それを覆してあげようか」
エンマはカメンライド・ディエンドのカードを、海東はエンマから渡されたファイナルカメンライド・ディエンドのカードを自分のディエンドライバーに装填する
［カメンライド］　［ファイナルカメンライド］
「「変身！！」」
［［ディエンド！］］
仮面ライダーディエンドとディエンドコンプリートフォーム。世界をまたぐ大怪盗ここに降臨
「っ…、まだ…無理か…」
テルはまだ起き上がれないようでうめき声を漏らしながらダークディケイドＣＦを睨みつけた
［アタックライド　ブラスト！］
［アタックライド　スラッシュ！］
ディエンドＣＦのブラストと、ディケイドＰＣＦのスラッシュがダークディケイドＣＦに放たれるがダークディケイドＣＦはバックステプで避けて行く
「やっぱり…避け方も同じか！！」
「何！？」
そこに背後に回っていたディエンドがディエンドライバーで撃つ
「くっ…何故だ…」

「テル君の同位体なんだから、根本的な所は同じなんだろ?だったら行動も読み易い。中学からの付き合いだしね」
［アタックライド　ブラスト！］
「はっ！！」
「ぐわっ！」
余裕ではないようだが、軽い口調でダークディケイドＣＦに言い放った後、ディエンドはブラストを使用して距離をとる
「おりゃあ！」
「はっ」
「小癪な！！」
そこにディケイドＰＣＦとディエンドＣＦの蹴りが入るが、それを避けるとすぐにパンチをディエンドＣＦに決め、さらに回し蹴りでディケイドＰＣＦをディエンドの元に蹴り飛ばす
［アタックライド　ブラスト！］
そしてダークディケイドブラストでディケイドＰＣＦとディエンド、さらにディエンドＣＦを狙撃して行く
「「「ぐわぁあああ！！」」」
破壊力は半端ではなかった。ただのブラストである筈だというのに…
「さてと、外野はいなくなった。さぁ、始めようぜ」
「っ…！」
ダークディケイドＣＦを睨むテル。だがその表情には辛さを感じ得なかった
「ハァ…ハァ…。ああ、良いだろう。決着を…つけるぞ！！」
テルがライドブッカーから取り出したのは金色に光り輝くカード
「変…身…！！」
［ファイナルレジェンドカメンライド　ディ・ディ・ディ・ディケイド！］
金色のボディ。紅と翠のオッドアイとなった複眼。純白の翼。ヒストリーオーナメントは各ライダーの紋章となった姿。仮面ライダーディケイドレジェンドコンプリートフォーム

「あまり長くは変身できないんでな…。一回だ。一撃での真剣勝負、これで決めるぞ」
「いいだろう…負けた方は…消える！」
ディケイドＬＣＦとダークディケイドＣＦは自身の必殺技のカードを、ディケイドライバーもしくはダークディケイドライバーのバックル部にセットし、叩く
［［ファイナルアタックライド］］
「「はぁぁぁぁぁ…」」
ソードモードになったライドブッカーに、ディケイドＬＣＦはマゼンタと金色の力を、ダークディケイドＣＦは黒と青の力を溜めて行く
「何だこりゃ…」
「空気が…震えている…？」
「っ…。テル君も加減無しか…」
ディケイドＰＣＦ、ディエンドＣＦ、そしてディエンドはなんとか起き上がって状況を確認する
「そういえば門河の奴、無意識に加減したって言ってたな…」
「はい…。一回マジ切れしたときに完全解放をやっちゃってて……半径１ｋｍ以内が焦土と化しました」
「それって大丈夫なのかい？」
「この工場は総面積６０平方ｋｍ。テル君とゼロの必殺技が本気でぶつかり合った時に発せられる衝撃の有効範囲はユキタカの試算だと半径３ｋｍ。恐らく大丈夫です。ただしこれはあくまでも通常対コンプリの試算。コンプリ対レジェンドだと…単純計算でも半径１０ｋｍ…ですかね」
「結構危険だね…だからといって周辺住民の皆さんを避難させるわけにはいかないか…」
「無理ですね。たまに万部としての活動で一時的な退去を願った事はありますけど…、今回は私情なんで無理です」
軽く異常なことを言ったディエンドだったが、三人はそんな事も気に留めずにディケイドＬＣＦとダークディケイドＣＦの方を向く

「ゼロ…今一度問う、何故そこまで本物にこだわる？」
「さあな…それが俺の本能なんだよ…」
「…そうか。ならっ！！」
ディケイドＬＣＦは翼をはためかせて、目の前に展開されたホログラムカードをくぐり抜けて行く
「終わらせるぞ！！」
ダークディケイドＣＦもまた走り出し、ホログラムカードをくぐり抜けて行く
「「うぉおおおおおおおおお！！」」
［ディ・ディ・ディ・ディケイド！］　［ダ・ダ・ダ・ダークディケイド！］
超強化ディメンションスラッシュと強化ダークディメンションスラッシュ。二つの力が
「「はぁあああああああああああ！！」」
ぶつかり合った。その瞬間爆煙が辺りを包む
「うわっ！？」
「っ…門河とあいつは！？」
「…あそこです！」
ディエンドが指差した先には互いに背を向け合った状態で離れているディケイドＬＣＦとダークディケイドＣＦの姿が
「どっちが…勝ったんだ…？」
「っ…」
「テル君！」
最初に膝をついたのはディケイドＬＣＦ
「俺の勝ち…ぐはっ！」
振り返り、勝利宣言を出そうとした矢先にダークディケイドＣＦが倒れる
「馬鹿…な…」
そのまま変身が強制解除され、ゼロは信じられないと言った表情でうつ伏せに倒れる

まるで時代劇の果たし合いさながらの決着の付け方だった

～～～

「…ゼロ」

変身を解除したテルはゼロに歩み寄る

「…俺の負けだ…お前の好きにしろ」

仰向けになって目をつぶるゼロ。死ぬ気なのだ

「…お前…俺に戻ってこないか？」

「何…？」

「ちょっ…テル君！？」

テルの口から放たれた発言に目を丸くするゼロとエンマ。ゼロの出生を知っているエンマにしてみればそりゃあ驚く事だろうが

「エンマ、これは俺達の問題だ、黙ってろ」

「う…うん…」

エンマを制した後テルはゼロに向き合う

「ゼロ、お前は俺の破壊衝動から生まれた存在。俺の兄弟みたいなもんだ。だが、コウガやサヨみたいな兄弟じゃないってことは分かってる」

「だからどうした…？」

「その破壊本能を今度は押さえ込む！そのために鍛えてきてるんだからな」

「ふっ…お前らしいな。結局、何時まで経っても変わらない物は変わらないか…」

「人間はそう簡単には変わらないよ」

「ふっ…それもそうだ」

二人はひとしきり笑った後、向かい合う

「俺が戻ればお前が失っていたものも戻るだろうな」

「主に破壊に関する本能がな」

「そうだ、同化する前にお前達に言っておきたいことがある…」
そしてゼロの口からある言葉が放たれた

ＮＥＸＴ　Ｗ＆ａｍｐ；ＯＯＯ　ｓｉｄｅ！

仮面ライダーＯＯＯ＆Ｗ（前書き）

舞台はＡＮＧＥＬ　ＡＴＴＡＣＫから４年後、高校生活最後の年。
戦いの中心にいた一つのカップルが結ばれる前日に事件は起こる。

これで決まりだ！
俺が変身する

仮面ライダーOOO&W

ドイツ　とある森林
ここに黒いマントを羽織った男と巫女装束を来た女性が来ていた
「ここか…」
「はい。ここにあの最高の錬金術師でるガラが眠っているそうです」
「成る程な。…行くぞ、奏」
男が取り出すのは鋼色のメダル。それを自身の影に投入する。その瞬間、影の形が変わって行く
「…来い、鋼！」
「闇より深き融炉より出でし…」
奏と呼ばれた女性の声音が少しずつかすれて行き、機械のような重低音になっていく
「其は科学の槌の鍛えし玉鋼！」
影より現れるのは鋼色の巨人、機械仕掛けの悪魔であり最強の機巧（アスラ・マキーナ）魔神鋼。だが機巧魔神は全て非在化した筈だった
「やれ」
鋼の腕に重力球が作り上げられ、それを地面に叩き付ける。そこには…
「メダル…のような蓋か」
「夏目君、どうしますか？」
「決まってるだろ。こじ開ける」
鋼が再び動き出す。蓋をこじ開けようと、両端を持って引っ張り上げた。その瞬間
「っ！？これは…！」
「セルメダル？きゃっ！！」
蓋を開けた場所から大量のセルメダルが溢れ出してきたのだ。そして巨大な塔を作り上げて行く
「何が！くっ…、鋼を戻すぞ！」

「はい」
夏目と呼ばれた男の影に鋼は戻って行く。そしてその場を離れようとした所に…
「しまっ！？」
「夏目君！」
二人は塔から現れたセルメダルの腕に拘束されてしまい、そのまま塔に引きずり込まれる
そして、塔を中心として円が描かれ、まるで大地がメダルのように浮かび上がって行ったのだった…

仮面ライダーＯＯＯ＆ａｍｐ；Ｗ　ＷＥＤＤＩＮＧ　将軍と２１のコアメダル

所変わって日本　第３新東京市内
「授業やっと終わったー！」
「和葉、まだ午前中だぞ？」
スマートブレインハイスクール。世界の融合の前にはファイズの世界にあった高校だが、今は再構成（リ・イマジネーション）の世界が融合したこの世界にある。
そして教室から出てきたのは、４年前のＡＮＧＥＬ　ＡＴＴＡＣＫにおいて仮面ライダーオーズとして戦った夏目智春の義妹である苑宮和葉と、仮面ライダーＷの片割れ翡翠セツナである
現在時刻は午後１２：４５分。丁度お昼休みの時間帯のため生徒達は購買に向かったりお弁当を広げたりと思い思いのことをしていた
「おーい！セツナ！和葉！」

「お昼食べよ！」
そこにお弁当を持ってきたのは温和な感じの少年と金髪碧眼の美少女。少年の方は仮面ライダーW及び仮面ライダージョーカーとして戦った碇シンジ。少女の方は仮面ライダーイクサとして戦った惣流アスカである。ちなみにカップルまたはバカップル、正確には婚約者どうしである
「そうだな。あ、今日弁当作ってないんだった…」
セツナは幼い頃から一人暮らしで弁当は自分で作っているのだがたまに寝坊とかその他諸々の要因で弁当っを作ってこないときがある。今日はたまたまその日に当たったのだ。といっても、落胆しているセツナに救いの手は差し伸べられる訳で
「セツナ、お弁当多めに作ってあるからさ」
「和葉、お前はエスパーか？」
「いいじゃないの。…たまに作っちゃうんだよ…お兄ちゃんの分」
「トモ兄か…そういえばどうしてるんだろうね？」
「連絡ないし、手紙を送ろうにも住所不定だもんね…」
和葉の口から出てきた言葉から、仮面ライダーオーズであった少年、夏目智春の話になる４人。弁当食べなくていいのか
「あ、でも悪いな和葉」
「いいってこのくらい」
「早く食べよ。時間無くなっちゃうし」
「そうね」
すぐに話題を切ったあと、４人は教室でお弁当を広げるのだった

さてそれから数時間後。学校も終わり部活に行く者は部活に行ったり、部活の無い者は帰宅したりと思い思いの放課後を過ごすことになる
「それじゃあ、部室にいこうよ」
「だな…朱浬姉も来てるだろうしな」
「奏先輩もじゃない？」

「ミサ姉…は今日は休みか」
「うん」
シンジ達４人が向かっているのは化学準備室…もとい科學部の部室である
「こんにちはー」
「あ、みんな来たんだ」
「何でここにいるの？ミサ姉」
「気にしないでアスカ。私も呼び出されたから」
「大体分かった…朱浬さんか…」
「ご名答！流石はセツナね」
セツナの呟きの後タイミングを測ったかのような絶妙なタイミングで化学準備室に入ってくるのは科學部部長である黒崎朱浬だ。セツナは呆れたように
「どうでもいいです。それで何のようなんですか？」
「ええ。それが直貴さんから連絡があってね、危ない事が起こるから対処してくれって内容の」
「なんというアバウトな…」
朱浬のアバウトさに頭を抱えるメンバーだったが、兎に角そんな事は行ってられない
「市街地に出てみましょう。何か分かるかもしれない」
「それじゃあ、僕とアスカ、それにミサ姉が調査に出るから…セツナは集めた情報から検索をお願いしたいから残ってて。和葉も残っててくれる？何か嫌な予感がしてならないからさ。あとカナ姉や樋口先輩、それにニアにも状況説明をして待機してもらってて」
「分かった」
アスカの提案を聞いた後シンジが細かい計画を決める。朱浬は基本的に傍観者だ。実際、第３生徒会の王立科学狂会（ロイヤルダークソサエティ）の会長も兼任しているのだから部活をしている暇も無いのだろう
「それじゃあ、出発！」
操緒の号令で、シンジ、アスカは化学準備室を出て行った

「大丈夫なのか…嫌な予感がしてならない…」

～～～

第3新東京市市街地

「にしても…平和だね」

「4年前が嘘のようね…」

とりあえず二手に分かれようという事になり、操緒は一人で、シンジとアスカが二人でそれぞれ見回りをしていた

災害は忘れた頃にやってくる。まさにその通り、それはいきなり起こった

「シンジ！あれ！！」

「えっ…！？」

いきなりシンジとアスカの目の前に線が引かれる。そして浮かび上がって行くのだ

「そんな…まさか！」

そして反転するとまた元の位置に収まって行く。そこにあったのは…

「森？」

「これって黒森（シュバルツバルト）！」

「知ってるの？」

「ドイツにある森林よ。植林したモミの木が密集して生育しているために黒く見えるの」

「何かあるのかもしれない、急ごう」

「ええ」

シンジとアスカは走り出した

「これって…」

「おい、操緒！何が起こってやがる！？」

「アンク！よくわからないけど…何かが起こってるんだよ！」

「まあ、いい。嫌な予感がする行くぞ」

操緒と合流したアンクも森に向かって走り出した

そして内部に入ると、中心に立っている塔のような建造物からナイト兵が大量に現れる

「さてと…それじゃあ久しぶりに行きますか」

シンジはダブルドライバーを腰に巻く

『シン、どうした？』

「まっ、いろいろあるんだよ」

［ジョーカー！］

『まあいいさ。和葉、俺の体頼むぞ』

［サイクロン！］

化学準備室にいるセツナとダブルドライバーを介して話をした後、それぞれのガイアメモリのガイアウィスパーをならす

「アンク！メダル！！」

「ちっ、無くしたらただじゃ置かねえからな！」

現場についた操緒とアンク。操緒はアンクから赤黄緑のメダルを受け取るとオーズドライバーを腰に巻き、メダルをセット、そしてオースキャナーでスキャンする

「「『変身！』」」

［サイクロン！ジョーカー！］

疾風と切り札の協奏曲が辺りに鳴り響き、シンジは仮面ライダーWサイクロンジョーカーに

［タカ！トラ！バッタ！…タットッバ、タトバ、タ・ト・バ！］

奇妙な歌が流れ操緒は仮面ライダーオーズタトバコンボに変身した

『そういえば、アスカさんは変身しないのか？』

「あー、それがママに取り上げられちゃって…。嫁入り前の娘が戦うんじゃありません！ってさ」

『そういえば、今日が6月5日だから…明日かシンとアスカさんの結婚式って』

「そう言う事。アンク、アスカのことお願いね。いくよ！」

「うん！」
ＷＣＪとオーズＴＴＢはナイト兵に向かって走り出す
「はっ！はっ！」
『シン！３時の方向から来てる！』
「了解！」
ＷＣＪは戦い慣れしており、複数戦も数多くこなしているため次々とナイト兵を蹴散らして行く
「どうやら、ヤミー擬きみたいだね。セルメダルが出てきた」
『だな。シン、一掃するならこっちの方が良い』
「オッケー」
ＷＣＪが取り出したのは黄色のメモリ
［ルナ！］
そしてサイクロンメモリとルナメモリを交換してバックルを開く
［ルナ！ジョーカー！］
幻想の切り札、ルナジョーカーになったＷは右半身をゴムのように伸ばして攻撃する
「決めるよ！」
ＷＬＪはジョーカーメモリを右腰のマキシマムスロットに差し込んで叩く
［ジョーカー！マキシマムドライブ！］
正中で分離すると、ルナサイドが分身して連続攻撃を行なう。そして
「『ジョーカーストレンジ！』」
ジョーカーサイドのパンチを叩き込み、一気に周りのナイト兵を一層した
「行くよ！」
［サイクロン！ジョーカー！］
Ｗは再びサイクロンジョーカーになりナイト兵を倒して行く

「はっ！はあっ！」
一方オーズＴＴＢは若干ぎこちない動きながらも着実に敵を倒して

行く
「操緒！このメダル使え！」
「オッケー！」
アンクが投げたのは緑色のメダル。それをオーズドライバーのタカメダルと交換する
［クワガタ！トラ！バッタ！］
頭部がクワガタヘッドになった亜種形態ガタトラバになる
「はっ！！」
オーズＧＴＢはクワガタヘッドからの電撃でナイト兵を倒して行く
「次だ！」
アンクはさらに黄色のメダルを投げる。今度はバッタメダルと交換してスキャンした
［クワガタ！トラ！チーター！］
脚部がチーターレッグになり、ガタトラーターになったオーズはチーターレッグのスピードを生かして走り出し、トラクローで切って行く
「今度は…これだ！」
次に投げられたのは青のメダル。今度はトラメダルを取り替えてスキャンする
［クワガタ！ウナギ！チーター！］
腕部がウナギアームになった亜種形態ガタウーターになったオーズはトップスピードを維持したままウナギウィップとクワガタヘッドのW電撃で次々とナイト兵を蹴散らす
「よっと！」
［タカ！トラ！バッタ！…タットッバ、タトバ、タ・ト・バ！］
オーズＴＴＢに戻ると、そのままメダジャリバーでナイト兵を蹴散らして行く。だが…
『キリが無いぞ！こいつら！！』
「どうすれば…」
倒しても倒しても増え続けるナイト兵達にさすがに戸惑いを感じる

WCJとオーズTTB、このままでは疲弊するばかりだ
「アンク！緑のコンボ！！」
「ダメだ！お前はコンボに耐えうる器じゃない…。智春だったら任せていたがお前じゃ無理だ！」
オーズTTBの言葉にすぐさま反論するアンク。実際、智春は最初の変身の際にコンボを連続して使用したがまったく持って疲労を見せていなかった。だが操緒は初変身時にコンボを使った後疲労で倒れてしまっているのだ
「第一、この状況でコンボを使って倒れてみろ…。お前の命も危ないし、メダルだってどうなるか分からん！」
「…むぅ～」
明らかに劣勢は必至なのだが、それでも戦い続けるWとオーズだが、いきなり攻撃が止む
「何だ？」
『攻撃が…止まった？』
そして塔の扉が開き、中から現れたのは古風な服を来た何かであった
「８００年の眠りから覚めたが…。欲望は無くなるどころか、増えておるな…」
『お前は…何者だ？』
少しエコーの掛かった女性の声で喋る存在…その名は…
「我が名はガラ。欲望にまみれた世界を破壊し新世界の王となるものだ！」
ガラがそう言った瞬間、辺りに風邪が吹き荒れた
「この世界を破壊する？世界の破壊者でも出来なかったことをお前がか？」
『シン？』
「ざけんなよ！」
WCJはまるで怒りを繁栄させたかのような暴風を纏った拳でガラに殴り掛かかる
「ぐっ…。成る程のぉ…。だが！」

ガラはすぐに体制を立て直す
「まあいいだろう。コアメダルは頂いて行くぞ」
ガラが持っている杖から風が吹く。それと同時に…
「しまった!?ぐっ!!」
アンクの持つメダルケースからコアメダルが全て奪われる。無事だったのはオーズに使っているタカ、トラ、バッタのコアメダルとアンクを構成しているタカ、クジャク、コンドルのメダルだけだ。だが…
「えっ…キャッ!!」
オーズドライバーにはめ込んでいたメダルまでもがガラに奪われる
「ちっ!」
「そんな…」
それと同時にオーズTTBも変身解除。操緒はやはり戦闘経験が浅い分疲労で倒れてしまう
「オーズドライバーも貰うぞ!!」
ガラがオーズドライバーを拾おうとしたその時、紫色の何かがオーズドライバーを奪い去って行った
「何?」
一瞬だけ見えたのは恐竜グリードギルの姿。そしてギルはすぐに姿を変える
「トモ兄!」
「久しぶりだな。みんな」
恐竜グリードギルこと夏目智春。そして智春の姿を見たガラは
「まあ良いだろう。今回はこのくらいにしておこう」
塔の中に引き返して行った
「何起こってるかは知らないけど…兎に角ここから出よう」
『分かってる』
智春の先導の下、WCJ、操緒、アスカ、アンクは森から出て行ったシンジ達が森から出て行った後、黒森(シュバルツドルツ)のある地点は強固な結界に覆われるのだった

～～～

メダルの塔　内部

「っ…うぅ…」

「ここは…？」

奏と夏目の二人は、玉座や石盤、実験器具のような物がある部屋で目を覚ました。自分達のいる場所は穴の上に浮いた板の上だったがそして玉座に座っているのはガラである

「お前が、ガラか？」

「その通りだ」

夏目の問いかけに尊大な態度で返すガラ。そしてガラはセルメダルを実験器具のような物に投入する。すると、道化師のような格好をした少女が姿を現した

「ほう、グリードでも無いのにメダルから生命体を作れるのか」

「我はかつて王に使え、コアメダルを作った。我に不可能はない。これを」

ベルと言うセルメダルの少女を2人作ったガラは、一人にはコアメダルを石盤にはめ込むように指示し、もう一人にはある命令を出したのだった

～～～

第3新東京市　第3新東京駅前

黒森（シュバルツドルツ）から逃げ出してきたシンジ達は智春に駅前まで連れて行かれた。ただ単に智春が荷物をとりにきただけなのだが。ちなみに智春の荷物はバースドライバーやバースバスター、それに着替えが入ったスーツケースだけというシンプルな物だ。財布は持ち歩いている

「トモ、いつ帰ってきたの？」

「昨日だよ。風の便りでシンと惣流の結婚式がもうすぐって言うの

を聞いたからさ。言っただろ？二人の結婚式の時には帰ってくるって」

高校生も終わりに近づき中学生の時とは違う雰囲気を持つ操緒の変化に若干戸惑いを見せつつもいつも通りの態度で接する智春だ。ちなみにさすがに成長しないのは拙いと感じているようで智春の外見上の年齢は操緒と同じになっている

「いや、ミサ姉が聞きたいのは何で連絡しなかったのかって事だと思う…」

「あー、いや、そのー…」

シンジの指摘にしどろもどろになる智春。そこにアンクが鋭い一言

「智春、お前忘れてた訳じゃないだろうな？」

「……」

「図星か」

とりあえず沈黙した智春は放っておいて、シンジはセツナに連絡をした後この後の予定を話し合う

「とりあえず、制服だと目立つし一回学校に戻ろう。話はそれからだ」

「そうね」

と、シンジの提案で帰ろうとしたそのとき、いきなりベルの音がする

「何だあれ？」

駅前にいた人々が一斉に音のした方向を見る。そこには道化の格好をした少女がワゴン車を引いて歩いてくる姿が

『貴方の欲望をかなえるチャンスタイムです。１００万円を手に入れる事が出来る代わりにあなた方には一生この髪型で暮らしていただきます』

少女の出したフリップには丁髷の絵が書いてあった

『イエスかノーでお答えください♪』

ワゴン車の中には１００万円の札束がぎっしりと詰め込まれている

「１００万円ねぇ…」

「僕にしてみれば必要ないお金だし…」

「操緒にしても別に今すぐ欲しいっていうお金じゃないし…」
「というかあんなリスクを侵してまで１００万円欲しくないわよ…」
あきれ顔のシンジ、智春、操緒、アスカ。アンクは智春が買ってきたアイスを食べている
「あいつ、ガラの野郎が作り出してるな」
意味深な言葉を言いつつ…
さて、ワゴン車の方に目を向けると奇術師に一人の男が尋ねていた
「本当に１００万円貰えるのか？」
『はい。ただし、一生この髪型で過ごしていただきます』
「ならイエスだ」
男の答えを聞いたとき奇術師はベルをならす。それと同時に男の頭がピンク色の煙に包まれて丁髷頭になった
『どうぞ１００万円です』
奇術師から１００万円を受け取った際に男の額からセルメダルが飛び出したが、誰も気づく物はいなかった
奇術師から１００万円を受け取ると男は帽子をかぶる
「こんなのこうやって隠しちまえば良いんだよ！」
だがすぐに帽子は飛んで行ってしまった
『言いましたよね？一生その髪型で過ごしていただきますと。なので帽子等も使い物になりません♪』
軽く爆弾発言もあった物の、本当に１００万円貰えると分かった人々はすぐさま殺到して行くのだった

その頃メダルの塔にある天秤の透明なタンクには次々とセルメダルが溜まって行く。そしてその傍らでは奇術師がコアメダルを石盤にはめている
「これは一体？」
「まあ、見ておれ。そうすれば分かる」
そしてタンクが満タンになったとき、丸盤が裏返る

その頃、駅前では…
「なっ！？」
いきなり地面が丸く区切られたと思うと、アンク、シンジ、智春、アスカの４人と操緒が分断されてしまう
「一体何が！？」
「お兄ちゃん！？」
シンジから連絡を受けたセツナとついでに和葉が漸く到着。だがすでに地面は上空に上がって、裏返ったのだった
「これって、トモ兄の荷物？」
「あ、オーズドライバーをトモが拾った限りだった！！」
「でもバースドライバーはあるよ」
操緒にはオーズドライバーと入れ替わりにバースドライバーが、智春はオーズドライバーが渡ってしまったようだった
「シンがいなくなったと考えるとＷも使えないか…。どうしたものか」
セツナはメダルの塔がある地点を見据えて呟いた

～～～

「嘘だろ…」
シンジ達が見た光景。木造の家々や長屋、そしてそれを見下ろすかのように立っているのは立派な天守閣を抱く城
江戸時代にタイムスリップしたのだった

WEDDING　将軍と21のコアメダル

江戸時代にタイムスリップしてしまったシンジ、アンク、智春、アスカの四人。さらに駅前にいた一部の人々も巻き添えを食らったらしく、江戸の街に不釣り合いな乗用車が停まっていた。さらに事態は深刻なようで…

「あれって…」

「お…おめえら、どっから来た!!」

「分からねえよ!それよりここはどこだ!」

「はあ?将軍様のお膝元、江戸だよ!」

江戸時代の人々と現代の人々とのいざこざが起こっていたのだった

「どうした物か…」

「まあ、ご愛嬌ってことで」

シンジとアスカはその状況を楽観視していた。まあ、タイムスリップした人達と過去の人達のいざこざはある意味お約束だが

「でも、止めた方がいいよね。この時代だったら死人がでるかも…」

「しょうがないか…」

時は江戸時代である。武士なんぞ介入してきたらそれこそ死人が出る事態になる。智春の意見にシンジは賛同し、いろんな物が飛び交う中に割って入って行くのだった

〜〜〜

さて、メダルの塔の中では夏目とガラが話していた

「成る程、時空を入れ替えるのか。そういえば、ここもそれで移動してたな…。そして江戸時代…あの髪型はそう言う訳か…」

と、そこに奇術師がベルをならしてくるが…

「俺はあの髪型にはならないからな?」

すぐさま拒否するのだった

「ふむ。残るはクジャクとコンドル。それに紫メダルか…」
そういうとガラはまたもセルメダルを実験器具のような物の中にいれる。すると今度は猿、虎、狸、蛇の特徴を持った合成ヤミー、鵺ヤミーが誕生した
「ヤミー…か」
「ゆけ。コアメダルを回収してこい」
ガラがそう言った後、鵺ヤミーの足下にメダルのような紋章が展開され、鵺ヤミーは転送された

〜〜〜

という訳で江戸時代。シンジと智春は現代の人々と江戸時代の人々の争い―（？）を止めに入っていた
「まあまあ。皆さん落ち着いてって」
「そうですよ。そんな争ったって何にもならないですって」
「そんな事言ってもよお！あんな格好してりゃ怪しむに決まってんだろ！」
「俺達は人間だって、何回言えば分かるんだ！」
どちらにせよ止める事は困難だろう
「ダーメダこりゃ」
「…この感覚…ヤミーだ！」
「え？」
アスカはもはや諦めたような表情で笑い、アンクは険しい表情で智春とシンジに告げた。その瞬間、メダルのような紋章が現れ鵺ヤミーが現れる
『オーズ、アンク、コアメダルを貰うぞ！』
左腕にある髑髏を動かして喋る鵺ヤミー。それを見たアンクは
「おい智春！お前、コアメダルはどうした…？」
「あー、ごめん。荷物と一緒に置き去りにしちゃった…。あ、でもトラとバッタはあるよ」

「タカはどうした！」
「ごめん。どっかで落とした」
「おい！」
智春に尋ねたが、見事にコアメダルが足りず戦闘不可。とりあえずコアメダルを持っている智春とアンクが戦闘を行なうのはかなり難しいようだ、となると…
「俺だけかよ…」
「ごめんねシン」
必然的にシンジに役割が回る事になる
「リングはあるし、大丈夫か」
シンジはロストドライバーを腰に巻き、紫電属性のリングを指にはめ炎を灯し、ジョーカーメモリのガイアウィスパーをならす
［ジョーカー！］
「変身！」
［ジョーカー！］
切り札の音楽と雷撃が一つになる。Wに似ているが、黒と紫が基調となりセントラルパテーションが存在せず、所々が刺々しくなり、角はWを模した物にさらに二本追加されている。仮面ライダーライジングジョーカー、ＡＮＧＥＬ　ＡＴＴＡＣＫにて多くの戦績を残した仮面ライダーである
「さーてと、久しぶりにいきますか！」
碇家に伝わる宝刀・紫電（メモリの力でその柄の部分にはマキシマムスロットが追加されている）を構えて鵺ヤミーに切り掛かる
「はっ！はっ！」
『よっ』
だが流石は猿のモチーフが入っているだけはあり、素早い動きでＲジョーカーの斬撃を避ける
「碇流斬魔術一式…」
紫電に紫色の力が溜まって行く。無論紫メダルの力ではなく、ジョーカーメモリの力だ

「魔斬一刀両撃！！」
紫電を一気に高速で振り下ろす。流石に対処出来ずに鵺ヤミーがセルメダルをまき散らしながら吹っ飛ぶ
「うわぁあああ！？」
周りにいた人々は怯え、逃げ惑っているのである程度人的被害は押さえられる。…筈だった
『ふん！』
体勢を立て直した鵺ヤミーの口から放たれた火炎弾がRジョーカーに放たれる。Rジョーカーなら避けられる攻撃だったが
「ぐわぁあああ！！」
避けなかった。後ろには隠れていた江戸時代の人々の姿があったからだ
「ぐ…」
「シンジ！」
「今出たら危険だ」
アスカはRジョーカーに駆け寄ろうとするが、すぐに智春に引き戻される
『コアメダルを寄越せ！』
鵺ヤミーは左腕の髑髏をアスカ、智春、アンクが隠れていた場所に放つ
「ちぃっ！！」
アンクは何故か分離可能な右手を飛ばして対抗するが…
『ぐっ…があっ…！』
力負けしてしまい、クジャクとコンドルが奪われてしまう。この時点でアンクの中にはクジャクとコンドル。そして自身を意志があるタカメダルだけとなる
『貰って行くぞ』
メダルのような紋章が鵺ヤミーの足下に現れ、鵺ヤミーは消えた
「つっ…うぅ…」
何は逃れたが、シンジは軽く火傷を負い、アンクもコアを奪われた

が故に若干苦しそうだった

～～～

所変わって現代。一回、学校に戻ったセツナ達は科學部のメンバーに状況を説明。丁度科學部のメンバーもニュースを見て向かおうとしていた所らしくセツナ達は科學部一行を現地に連れて行くのだった

「ほー、凄いなこりゃ」

一応部長代理である樋口は黒森（シュバルツドルツ）のある場所に張られた結界を見て目を輝かせていた

「この中に碇君達がいるんですか？」

「それが違うの。シン達は今、行方不明。トモとアンク、それにアスカも…」

嵩月奏の問いに操緒が返す。和葉はセツナと共に結界の破り方についての検索を始めている。

「おい、操緒ちゃん。今なんて言った？」

操緒の返答を聞いていたのか樋口が操緒に問いかける

「え…それにアスカも…」

「その前」

「トモとアンク？」

「智春が戻ってきてるのかよ！」

操緒がさらりと言っていたので嵩月は気づかなかったようだが、智春が帰ってきているという真実をここで科學部のメンバーは初めて知ったのだった

「トモ兄の事は後でにしてくれ。今は別次元に飛ばされたシン達がどうすれば戻って来れるのか。それと、この結界はどうしたら破れるのか…。ってあれは！」

セツナが指し示した方向には空中に上がる地面の姿が

「おおお！何が起こっているんだ！」

「これで2つ目…。次はどこと繋がるんだろ…？」

大騒ぎする樋口と険しい表情の和葉であった。ちなみにこの時入れ替わったのは恐竜時代まっただ中のアメリカだったことを追記しておく

「で、翡翠。なにか分かったのか？」

「一応ですけどね。あの結界には一部分だけもろい所があります。そこに強力な一撃を…例えるならば黒鐵の黒の剣撃や白銀の白の剣撃に相当するくらいの。弱くてもダメージが蓄積されればどうにかなりますけどね」

ここで機巧魔神（アスラ・マキーナ）の話題が出たが、今この世界には機巧魔神はない。となると必然的に仮面ライダーの力が一番有効なのだ

「オーズドライバーさえあれば、機巧魔神コンボで何とかなったかもしれないのが…しょうがないか」

「どうします？」

「とりあえずカナ姉、焔月を使ってみて

「分かりました…。焔月！」

嵩月の持つネックレスより現れるは灼熱の炎で作り上げられた刀。嵩月家の守り刀・焔月。悪魔の存在しないこの世界では死ぬ気の炎と同じような原理で悪魔の能力と同等の力が発揮されるようになっているらしい

ともかく放たれる地獄の業火の一撃はセツナが示したポイントに向かって行くが…

「ダメか」

パワー不足なのかどうなのかは分からないが結界には特に何の変化も無かった

「兎に角、シン達が自力で戻ってこようがこまいが結局この結界は壊さなきゃならないし、いろいろ試してみよう」

セツナの主導の下で科學部は結界の破壊の方法を探すのだった

～～～

所変わって江戸時代
とりあえず騒ぎが一段落すると、またも始まっていた。見た所カゴやらざるやらが飛び交い、車を盾にして防御したりといろいろやっているようだ
「皆さん、落ち着いて」
「お…お前だって人なのか！あんな姿になりやがって！」
「それにそっちの男の腕！い…一体なんなんだ！」
「え…」
シンジが止めに入るが逆に怯えられる一方だ。どうも不可抗力だったとはいえ変身したり怪人化したりしたのは拙かったのか
「まあ待て。彼らは危害を加えたりしない」
そんな状況で江戸時代の人々をいさめたのは一人の武士だった
「だけど新さん…」
「思い出してみろ。あの時、避けられる攻撃を彼は避けようとしなかった。人が後ろにいるという事に気づいてな」
新さんと呼ばれた武士の言葉に納得したのかおとなしくなった人々。
そしてシンジ達に名乗る
「俺は貧乏旗本の三男坊徳田新之助だ」
「碇シンジです」
「惣流アスカです」
「夏目智春って言います。で、こっちはアンク」
「見た所、そっちの人達も含めて日本の人ではないな？」
「あー、まあ、そんな感じですかね…？」
「んなもんどうでもいい！行くぞ！」
徳田の問いに曖昧な返事をする智春。そんな智春の手を引いて、アンクはその場を離れたのであった
「ん？これは…」
その時落として行ったセルメダルを徳田は拾った
（まさか…）
何か思い当たる節があったのか、徳田もまたその場を去ったのだった

「アンク、大丈夫？」
「ちっ。コアを二枚持ってかれた。次に狙われるのは…」
「分かってる。僕の紫メダル」
紫のコアメダルを体内に宿したが為に恐竜グリードになってしまった智春である。次にガラが狙うのは紫…つまり自分のコアメダル
「そう言えば、トモ兄がグリードになってるのは分かってるけど、コアメダル何枚あるの？」
「プテラ４、トリケラ３、ティラノ３の１０枚。うち意識を宿したコアがプテラ」
本来なら９枚で誕生する筈なのだが、智春の場合は事例が特殊なためこうなっているのだ。ちなみにコアが揃っているため完全な状態なのだが、とくに特別何かするわけでもない
「兎に角、今日の寝床を探そう。多分、今日一日で戻れるとは思わないし…」
「この格好もなんとかしないとね」
とりあえず現代の格好は結構目立つ。どこか適当な所でこの時代の服を調達しなければならないのだ
「とりあえずさ、一回入れ替わった所に行ってみようよ。知り合いがいるかもしれないし」
シンジの意見で入れ替わった現代の地域に行ってみる。するとそこには…
「…天堂屋？」
駅前の商店街の一角もここに来たようで、運良くリイマジカブトである天堂ソウジの実家であるおでん屋天堂屋があった
「中に入ってみるか…」
アンクが扉を開ける。すると
「いらっしゃい！…おっ、シンジくんに惣流君、アンクも。お、智春君帰ってきてたのか？」
現代の人々だろうと江戸時代の人々だろうと、笑顔で接客する天堂

ソウジの姿があった
「いやあ、びっくりしたよ。何か空が回ってるなと思ったらいつの間にか江戸時代とはな。ははは！」
（そうだった、この人は何が起こっても動じない人だった）
流石は天の堂に座す男。滅多な事では動じないのだ
「で、何の用だい？」
「えーっと、見ての通りなんですが江戸時代にいると僕ら浮くんで、一晩泊めてもらってもいいですか？」
「別にかまわないぞ？マユやおばあちゃんは買い物に出たから多分この事を知らない筈だし、今日戻れるという保証はないからな」
「ありがとうございます」
ソウジは快くシンジ達を泊めてくれるようだった
「それじゃあ、少しお店を手伝ってくれるか？俺一人だと大変だからなぁ」
「あ、それじゃあ僕がお鍋見張っときます」
「じゃあ僕は接客っと。ほら、アンクも」
「ちっ、しょうがねえな」
「惣流君も接客を頼む」
「はーい！」
泊めてくれるのだからやっぱり楽するわけにはいかないと、シンジは厨房に、智春とアンクそれにアスカは注文をとり始めた。まあ結局はがんも、大根、卵のおでんしかないのだが

さてその一方で現代で結界を破壊するのに力を入れている科學部はと言うと…
［ファング！マキシマムドライブ！］
「ファングストライザー！！」
セツナがロストドライバーろファングメモリで変身した仮面ライダーファングが結界に対してファングストライザーを放つがまったく効果が見えない

「ダメですか…」
「みたいだ。樋口先輩、どうです?」
「んー、確実にダメージは入ってるんだけど、これと言う決め手が無いんだよなぁ…。もう少し出力が高ければ…」
「出力…か」
一瞬ファングは死ぬ気の炎の同調も考えたが今現在氷河属性のシモンリングを持っていない以上は使えない
「ツインマキシマムは危険過ぎる…。後考えられるとすれば黒鐵だが…今は使えないし、万が一使えたとしてもトモ兄がいないとな…」
「バース・ディだったら?」
ファングの呟きに和葉はそうこぼした
「バース・ディ…そうか!その手があったか!!」
ファングは何かひらめいたかのように智春のスーツケースを開く
「バースドライバー…これなら行けるかもしれない!」
「貸して、操緒がやる」
バースドライバーを腰に巻く操緒。そしてセルメダルを投入し…
「変身!」
グラップアクセレーターを勢い良く回した
［カポーン］

〜〜〜

所変わって江戸時代。既に夜は明け朝になっていた
「また行くんだろ?頑張れよ」
「ありがとうございました、ソウジさん」
ソウジに見送られシンジ、アスカ、智春、アンクの４人はまた江戸の街に向かう
そして川に掛かる橋にさしかかった所で、鵺ヤミーと無数のナイト兵が姿を現した
『オーズ、お前のメダルを貰う!』

「そうはいかないよ」
智春はオーズドライバーを腰に巻き、トラとバッタのメダルを装填する
「智春、一か八かの賭けだ。それを忘れんじゃねえぞ？」
「分かってるって」
アンクはそう智春に念を押す
「ぐっ！」
そしてアンクはコアメダルだけの姿になる。タカメダルは智春の手のうちへ、クジャクとコンドルはアスカの元に飛んで行く
「行くよ…アンク！」
タカメダルをオーズドライバーに装填し、オースキャナーでスキャンする
［ジョーカー！］
シンジもジョーカーメモリのガイアウィスパーを鳴らし、ロストドライバーを腰に巻いた後、ジョーカーメモリを装填する
「「変身！！」」
［タカ！トラ！バッタ！…タットッバ、タトバ、タ・ト・バ！］
［ジョーカー！］
オーズＴＴＢとＲジョーカーはそれぞれメダジャリバーと紫電を握るとナイト兵の大群に突っ込んで行く
「はっ！はあっ！」
「てやっ！」
ナイト兵一体一体はそれ程耐久力や力がある訳ではなく倒すのは楽だが、それが束になるとなるとかなりの強敵である。ましてやそこに鵺ヤミーもいるのだ
「碇流斬魔術二式：地獄覇斬撃！！」
Ｒジョーカーは紫電を地面に突き立てる。それと同時に広範囲に渡って衝撃波が発生しナイト兵をセルメダルに還元する
「くそっ、数が多い！」
「このままじゃ…キリが無い！」

オーズＴＴＢとＲジョーカーだけでは手が足りない。このままでは体力の消耗やらで負けるどころか、智春のコアメダルも奪われてしまう
「どうすれば…」
そう言いながらも倒して行か無ければならない状況である。次々とナイト兵を蹴散らして行くがキツい物がある
と、そこに蹄の音が聞こえてくる
「徳田さん？」
「助けにきたぞ。さあ」
徳田新之助。だがその身なりは貧乏旗本の身なりではない
「徳川家の家紋…成る程ね」
Ｒジョーカーは何かに気づいていたがあえて口には出さないようだった
一人だけではあるが戦力が増えた。やはりいるといないのでは大違いで負担は少なくなる
「危ない！」
だがナイト兵が女性を攻撃しようとする…が
「おりゃあ！！」
現代の男性が女性を助けた
「俺達もやるぞ！」
「「「おおー！！」」」
一般人の皆さんも物干竿やら何やらを持ってナイト兵に応戦していく
「うむ、皆味方だ。思う存分戦え」
「はい！ありがとうございます！」
徳田も日本刀を抜刀し、峰打ちではあるがナイト兵を倒して行く
［トリプル！スキャニングチャージ！］
［ジョーカー！マキシマムドライブ！］
「せいやぁあああああ！！」
「碇流斬魔術奥義：雷龍爆炎翔！！」
オーズバッシュと雷龍爆炎翔がナイト兵を一掃した。それとほぼ同

じときにほぼ全てのナイト兵が全滅した
『そんな…馬鹿な！』
鵺ヤミーは逃げ出して行く
「逃がさない！」
「いくぞ！」
「はい！」
オーズＴＴＢはライドベンダーに、徳田は馬に飛び乗り鵺ヤミーを追った

『このお！！』
「はっ！」
鵺ヤミーの攻撃をうまくいなしてからオーズＴＴＢはトラクローで一撃を加える
「ヨーロッパの王家から徳川家に献上された物だ！受け取れ！」
徳田は懐から箱を取り出し、中にあった橙のコアメダルを智春に投げる
「コアメダル…でもなんで？」
「これだ」
さらに徳田が取り出してみせたのはあの時落として行ったセルメダルだ
「これを見たときにピンと来たんだ」
「成る程！…それじゃあ」
オーズＴＴＢはオーズドライバーに橙のコアメダルをセットし、オースキャナーでスキャンする
［コブラ！カメ！ワニ！］
橙のコアメダルは爬虫類の動物達の力が込められたメダル…
［ブラカ～ワニ！］
どくろを巻いたコブラの姿を模したコブラヘッド。亀の甲が腕に装着されたカメアーム。そしてワニの歯を模したワニレッグ
オーズの爬虫類系のコンボ、ブラカワニコンボだ

「いくよ！」
ワニレッグにオーラングサークルから力が込められる
「はっ！はあっ！」
そして鵺ヤミーを蹴って行く。それと同時にワニの顎のようなエフェクトが展開され鵺ヤミーを噛み砕く
『この！！』
鵺ヤミーは左手の髑髏に紫色の炎を纏わして飛ばすが…
「よっと」
両腕のゴウラガードナーを合わせてガードする技ゴーラシールデュオを発動してガードする。それにより髑髏は破壊される
そうすると形勢不利と見たのか鵺ヤミーは火炎弾で攻撃する
「うわっ！？」
オーズＢＫＷは横に回避する。そして笛を見つけた
「蛇嫌いではないいんだけど…なんかね。まあ仕方ないか」
そしてその笛を吹くとコブラヘッドからコブラが現れる
『！』
鵺ヤミーも首に巻き付いている蛇で応戦するがこれもコブラの勝ちである
「成敗！」
［スキャニングチャージ！］
地上を滑るように移動しながら橙色のオーリングをくぐり抜け…
「せいやぁあああああああああ！！」
鵺ヤミーの目の前で飛び上がりオーズを包み込むように現れたワニの頭部のようなエフェクトを纏いながらはさみ蹴りを鵺ヤミーに炸裂させた。
オーズブラカワニコンボの必殺技ワーニングライド。鵺ヤミーは爆発しメダルになる
「やったねトモ兄」
遅れてやってきたＲジョーカーは変身を解除する。オーズＢＫＷも変身を解除してから徳田に向き合う

「ありがとうございました」
「なあに。頑張れよ」
徳田…いや、暴れん坊将軍徳川吉宗公は馬に乗り江戸城へと戻って行った

これで決まりだ！・俺が変身する

メダルの塔
「くっ、まさかこれ程とは…」
「さすがは僕の弟だな」
ガラは鵺ヤミーが倒されたところを見て焦り、夏目は悠長に構えていた
「だがもうすぐ最後の天秤が動く！そうすれば世界は終わりを迎える！」
そういって天秤を方を見てみると、タンクの中のセルメダルは後少しで満杯になる所まできていた
「それで、君に相談なんだが」
「なんじゃ？」
夏目はガラに対してこんな提案をした
「最後のセルメダルを智春…いや、オーズから手に入れてみないかい？」
「ほう…」
夏目の提案にガラはしばし考えた後
「ほほほほほほ！面白い！オーズの欲望で世界を終わらせるか、それもまたよいのう。いいじゃろう」
ガラは奇術師を呼び出すとメダルのような紋章を奇術師の足下に展開して奇術師を転送した

～～～

所変わって江戸時代
アンクはあの後ナイト兵と鵺ヤミーが残したセルメダルを集めてコアメダルを投入することで復活した
智春達はというとともに戦ってくれた人々にお礼を言っていた

「ありがとうございました」
「おかげで助かりました！」
「いいっていいって」
とりあえず現代の人々も江戸時代の人々も楽しそうにしており、無駄な争いはなくなったんだと一安心していた。とそこにベルの音が鳴り響く
「…お前は！」
現れるのはガラが送り出した奇術師だ
「あなた様の欲望のチャンスタイムです。元の世界に戻れる代わりにここにいるすべての方々が消えてしまいます」
智春に対して問いかけを行う奇術師。その問いに周りの人々がどよめく
「イエスかノーでお答えください」
「トモ兄…」
シンジは智春のことを心配そうに見つめる
「少しいいか？」
「何でしょうか？」
智春は奇術師にこんな問いを投げた
「僕だけじゃ何の意味もないんだ。この三人も一緒に…」
「ご家族ですか？」
「そんな…ことかな？」
智春がだした案は自分だけでなく、シンジとアスカそれにアンクも一緒に戻れるのならというものだった
「ではいいでしょう。ご家族の皆様が戻れる代わりにそれ以外の方々が消えてしまいます。イエスかノーでお答えください」
問いかけを訂正して智春に尋ねる奇術師。どちらにせよ周りはどよめく
「っ…トモ兄！」
「私たちだけ残ったって何にもならないでしょ！」
シンジとアスカは反論するが智春は聞き耳を持たない

「みんな僕たちを助けてくれたんだよ！！」
「…僕の答えは…」
智春が出した選択は…
「トモ兄！」
「イエスだ」
イエスだった

「ほほほほほほほ！！」
メダルの塔でガラは大笑いする。そう智春がイエスと言った瞬間にタンクには大量のセルメダルが落ちてきたのだ
「皆様、これにてサービスを終了させて頂きます。この世界のご利用誠にありがとうございました」
現代の世界では奇術師がテレビを通じて世界の終わりを告げた
「そんな…」
「和葉！まだあきらめるな！もしこれを答えたのが、トモ兄かシンだったら…」
和葉は絶望した表情になるがセツナはまだあきらめていなかった。セツナにはしっかりとした確証があったのだ
「トモ兄かシンだったら…世界を終わらせるようなへまはしない！」
一つは江戸時代につながり、二つ目は恐竜時代につながった。そしてもう一つの時空が歪もうとしていた…が
「なんじゃ！これは！！」
なんとタンクは満杯になるどころかセルメダルが溢れ出したのだ。
ガラは驚愕の表情になる
「さすがは僕の弟だね」
夏目は満足げな表情になっていた
「どういうことじゃ！貴様！！」
「ふふふっ」
夏目は意味深に笑うだけだった

「…あ…あれ？」
「消えてない？」
シンジとアスカは恐る恐る目を開けた。広がった風景は見慣れた現代のものではなく、まだ江戸時代だった
「そん…な…」
「僕の欲望をかなえるんだろ？」
驚く奇術師に智春は軽く笑いながら答えた
「それなら僕の欲望はこんなんじゃ満たされない。紫グリードでもある僕の欲望はね」
紫が司る欲望は無。満たされていない状態が満たされているという矛盾した存在なのだ。だからこそ…
「常に無だからこそいくら満たされても満たされないんだよ。まあでもこれで僕の欲望は叶ったんだけどね」
「え…？」
「いっただろ？家族も一緒にって。僕にとっては世界中のみんなが家族だと思ってる。僕が誰か一人を家族と思えばみんなが家族なんだよ」
「そ…ん…な…」
智春の説明を最後まで聞いた後奇術師は跡形もなく消え去った

「馬鹿な！」
「ははははは！！さすがは僕の弟だ。まさに欲望の王、欲望は世界を救う！！」
メダルの塔ではガラは憤慨した様子で智春達の状況を見ており、夏目はというと高笑いして智春を賞賛した。いや、欲望をか

～～～

「ありがとうございました！！」
時空が元に戻っていく。メダルのように切り裂かれた時空がまた元

の状態に戻っていったのだ
そして元の世界に戻ると、近場にあった三台のライドベンダーをバイクモードにして智春、シンジ、アスカはそれぞれ乗った
「あ、そうだ。アスカ、これこれ渡しておくよ」
「え？」
シンジがアスカに渡したのは自分が持っている二つ目のロストドライバーと第１４使徒との戦いのときに惣流クラウスの幻影より渡されたスカルメモリだ
「イクサシステムはキョウコさんに取り上げられてるんでしょ？内緒だよ？」
そうアスカに言った後、シンジはダブルドライバーを腰に巻く
「セツナ、聞こえる？」
『シンか？戻って来れたんだな？』
「なんとかね。結界を破れる？」
『ミサ姉がバースに変身すれば何とかなるっぽい』
「それってＣＬＡＷｓ・サソリのこと？」
『ああ。トモ兄には悪いけど、セルメダルを１０００枚使う。もろくなるところができるからそこから一気に入り込め！』
「わかった」
シンジはダブルドライバーを外す
「トモ兄、ＣＬＡＷｓ・サソリを使うってさ」
「オッケー。それじゃあ行くよ！」
シンジはロストドライバーを腰に巻き、ジョーカーメモリのスタートアップスイッチを押す
［ジョーカー！］
智春はオーズドライバーに漆黒、銀色、鋼色のメダルを順にセットする
「あれ？トモ兄、それって黒、鋼色、銀の順じゃなかったの？」
「機巧魔神のメダルは特殊なメダルなんだ」
「へ？」

「すべてのメダルが、すべての部位に対応している。そしてこれが機巧魔神メダルの本当のコンボ！」
智春はメダルをオースキャナーでスキャン。シンジもジョーカーメモリをロストドライバーのバックルにセットして倒す
「「変身！！」」
［ジョーカー！］
シンジはいつも通りRジョーカーに変身する
そして智春は…
「クロガネ！シロガネ！ハガネ！…ク～ロ～ガネッ！！」
コンボソングと共に智春のことをメダルのエフェクトではなく、漆黒の闇が包む
そして聞こえてくるのは奇怪な呪文。しかもそれはオーズドライバーから聞こえてくる
［闇より気高き欲望より出でし…其は科学の裁きを下す影！］
呪文が完成したのと同時に闇がはれる。そこにはオーズが立っていただがその姿は今までのどのコンボにも当てはまらない。辛うじて機巧魔神コンボのクハシガネに似ているが細部の形状が異なっている。まるでオーズの素体が機巧魔神・黒鐵の鎧を纏ったような姿。オーラングサークルはプトティラのように出っ張っている
漆黒の装甲に縁の色が赤のオーラングサークル、緑色の複眼を持ったオーズの姿
「仮面ライダー…クロガネオーズ！」
仮面ライダークロガネオーズ。機巧魔神・黒鐵と欲望の王オーズが融合した新たなる仮面ライダーと言っても差し支えのないライダーだ
「行くよ、シン！」
「分かってる。アスカ」
「何、シンジ？」
「アスカはミサ姉達と合流して。ここから先は僕とトモ兄でやるから」
「…分かったわ」
アスカはライドベンダーを走らせた

「それじゃあ、行くよ」
Rジョーカーと Kオーズは大量のタコカンドロイドが作り上げる道を上っていく
「エネルギー充填完了！！」
［カポーン　ドリルアーム　クレーンアーム　ショベルアーム　キャタピラレッグ　カッターウイング　ブレストキャノン］
操緒の変身した仮面ライダーバースはバースドライバーにセルメダルを１０００枚投入してグラップアクセレーターをまわす。するとバースＣＬＡＷｓがすべて現れてサソリのような形状をとった。これがバースの支援メカＣＬＡＷｓ・サソリだ
「行くよ！」
ＣＬＡＷｓ・サソリは尾の部分に虹色の力を溜め込むとセツナが見つけたもろくなっている部分に一気に放つ。すると結界にひびが入っていく
［ジョーカー！マキシマムドライブ！］
Rジョーカーはジョーカーメモリを紫電にセットしてマキシマムドライブを発動させた
「ライジングライダースラッシュ！！」
その一撃で結界は破壊され、Rジョーカーと Kオーズはメダルの塔の最上階に乗り込んだ
「はっ！」
最上階を警護していたナイト兵を蹴散らし、Kオーズはガラの前に立ちはだかり、Rジョーカーは夏目と奏を助け出す
「大丈夫ですか？」
「ああ。なんとかな」
奏は未だに寝ているため夏目だけがRジョーカーの問いに答えた
「ならいいです。早く脱出してくださいね」
そういうとRジョーカーは Kオーズの横に立つ
「さてと、ガラ…だったけ？」
Rジョーカーはガラに向かいいつのも決め台詞をいう

「さあ、お前の罪を数えろ！！」
「科学の審判をお前に下す！」
さらにKオーズも即興であろう決め台詞をガラに対して言い放った
「ふん！貴様らに負けるほど、我は弱くないわ！」
そういうとガラはタンクから溢れ出したセルメダルを吸収して怪人態となる。そしてガラは長い腕を使ってKオーズとRジョーカーを吹っ飛ばすと自身も下におりた

「うぉおおお！！」
Rジョーカーは紫電で切り掛かっていくが、強固な外装の為に効果があるとは実感しにくい
「シン！離れろ！」
Kオーズは右腕に重力球を作り出す
「せいやぁあああああああ！！」
黒鐵の技でもある黒の拳撃がガラ怪人態に直撃する。威力は相当なものであり外装じひびが入ったと思うとそのいひびからセルメダルが溢れ出す
「ば…馬鹿な！」
すぐに傷口を塞いだが、Rジョーカーはあることに気がついた
「今一瞬、人の手が見えた」
「やっぱりな。あいつは人間を取り込んでいるんだ。セルメダルを取り込めたのも、肉体がないのにこの世界に復活できたのも、人という存在を取り込んだからだ。グリードで言うコアメダルの役割を果たしてるんだろうね」
「それじゃあ…中にいる人を助けないと…」
「ああ。ガラは倒せない」
「その通りじゃ！！」
ガラは腕をのばして攻撃してくる。Kオーズはいくつか重力球を作り上げて軌道をそらすことで回避し、Rジョーカーは身軽なフットワークでよけていく

そしてKオーズは空間の一部を切り裂き、機巧魔神・白銀が使用している刀を取り出す
「こいつでもう一回ガラに傷を作る」
「つまり…」
「その傷から一気に引きずり出せ！」
「分かった」
Rジョーカーはいきなり変身を解く
「聞いてたろ？セツナ。行くよ」
［ジョーカー！］
シンジが木陰に向かってそういうとダブルドライバーを巻き、ジョーカーメモリのガイアウィスパーを鳴らした
「ばれてたか」
［サイクロン！］
木陰から姿を現したセツナはサイクロンメモリのガイアウィスパーを鳴らした
「「変身！！」」
そしてエクストリームメモリが飛来する
［サイクロン！ジョーカー！…エクストリーム！］
シンジとセツナは仮面ライダーWの最強フォーム、WCJXに変身した
「行くよ」
Kオーズは刀を振るう。それと同時に空間の断層が発生し、ガラの外装が破壊される
「ぐぉおおおおお！？」
「いまだ！！」
そこにWCJXが走って間合いをつめると、傷口から見えた人の手をつかんで引っ張った
「ぐ…させるかぁあああああ！！」
ガラは必死で抵抗するが空間の断層に引きずり込まれないようにするので精一杯の状態で最強フォームに勝てる訳がなく、力負けして

しまい、取り込んでいた人…女性を引っこ抜かれてしまった
「よしっ！」
『トモ兄！』
「分かってる！」
ＷＣＪＸは女性を抱きかかえて跳躍してその場を離れる。それを確認したＫオーズはメダルを再スキャンした
［スキャニングチャージ！］
「はぁぁぁぁぁぁ…」
Ｋオーズの姿が変わる。漆黒の鎧に走っている金色のラインがすべて赤に染まり、背中には焔の翼が現れる。さあがらアスラクラインの世界で魔神相克者（アスラクライン）とった夏目智春が自身の機巧魔神である黒鐵と使い魔（ドウター）のペルセフォネが融合した姿である慟哭する魔神（クライインド・アスラ）を模したような姿だった。そしてその右手には焔の刀焔月が握られている
［闇より気高き欲望より出でし…其は科学の裁きを下す影！］
「せいやぁあああああああ！！」
またもオーズドライバーから聞こえてきた呪文とともにＫオーズはガラに接近。そして一気に下段からＸ字にガラを切り裂いた
「ぐわぁあああああああああああ！！」
その一撃はとてつもなく重く、ガラは吹っ飛ばされた
「やった」
『それ以上にその力…実に興味深いな』
ＷＣＪＸは意識を取り戻した女性をバットショットとスタッグフォンの案内で逃げるように指示し、Ｋオーズの様子を見に来たが、そのときにはもう戦闘は終わっていた
「これで、すべて終わる…ぐっ！？」
ＫオーズがＷＣＪＸの方を振り向いたとき、ガラの腕がＫオーズを貫き、プテラ、トリケラ、ティラノのコアメダルが奪われる
「ぐっ…！」
「トモ兄！」
『まだ生きていたのか…！！』

メダルの塔。ガラは命からがらここに逃げてきて、石盤に智春より奪った紫メダルをはめ込む
「変…身…！」
ガラがそうつぶやくと同時にコアメダルがガラに取り込まれていく。さらにあたりのセルメダルをすべて吸収し、さながらワイバーンのような姿をとった
『ぐぉおおおおおおおお！！！』
そしてメダルの塔を破壊しながら飛び立つ
『うわっ、何でもありかよ…』
「トモ兄、いける？」
「大丈夫だ」
［ライオン！トラ！チーター！…ラッタラタ～ラトラーター！］
Ｋオーズはオーズラトラターコンボにコンボチェンジするとライドベンダーを呼び出し、さらにトライドベンダーにしてから乗るＷＣＪＸはマシンハードタービュラーを呼び出して乗るそしてオーズＲＴＴとＷＣＪＸはガラ怪物態に向かって飛行していった

ＮＥＸＴ　ＦＯＵＲＺＥ＆ａｍｐ；ＥＶＡ　ｓｉｄｅ！

仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION（前書き）

ライダーが存在しない世界…。ここでは福音の巨人が世界を守っていた…。
しかし、ある一人の少年による世界の介入でこの世界のルールは脆くも崩れ去る。
そして現れるは、宇宙の力を宿したライダー

仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION　奇跡の価値は

青春スイッチ・オン！

仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION

「たっく…あの馬鹿兄貴もいい加減にしてほしいよなぁ…」
第9使徒マトリエルの襲来の翌日、門河テルの弟である門河コウガは自宅にある自身の部屋であるものを見つめながら一人愚痴った
「この世界はライダーがいない世界…だからこそライダーシステムを持ってきてはならないって言ったのは兄貴のはずなのにな…」
コウガが見ていたものはフォーゼドライバー。この世界ではない別の世界で起こったＡＮＧＥＬ　ＡＴＴＡＣＫと呼ばれる世界征服をもくろむゼーレとそれを阻止しようとする仮面ライダー達の戦い。
このときコウガは仮面ライダーフォーゼとして戦いに参加していたその後フォーゼドライバーは調整のために兄であるテルが持っていった筈なのだが、マトリエル襲来時にいきなり現れ
『この世界にライダーの力が必要になった。コウガ、これをもっとけ』
そういって渡してきたのだ。…一方的に渡されてテルはとっとと帰ってしまったが
「まあ、愚痴っててもしょうがないか…。何が起こるのかは知らないけど…」
コウガは一度思考を中断して本棚の上においてある時計を見る。まだ登校までには時間がある。この後どうしようかと考えようとした矢先に扉が開く
「コウガ、ご飯って言ってるでしょ！」
「ん？ああ、悪い。考え事をしててな」
入ってきたのは赤みがかった茶髪をショートヘアーにした少女、門矢マミ。彼女はテルの友人である門矢エンマの妹である。特に何もないのだがこの世界に滞在している
「まったく…」
「さーてと飯だ飯だっと」

まあとりあえず準備は後でいいかと考え、コウガは部屋を出るのだった

〜〜〜

「あ、コウガ。おはよ」
「シンジか…相変わらず早いな…」
テーブルに料理を並べていたのはこの世界の主人公である少年、碇シンジ。そういえばあの世界にいたWの片割れも碇シンジだったなという関係ないことを心の中で考えつつコウガは並べられた料理を見る
「白米にみそ汁にほうれん草のおひたし、でもって焼き鮭か…典型的な日本人の朝ご飯だな」
「寝坊しちゃってさ、時間がなかったから」
「それでもこれだけ作れるんだから大したものだよ」
コウガの言葉にはにかみながら返すシンジ。そこにフォローを入れるマミ。とりあえず平和だ
「そういえばアスカは？」
「あー、まだ寝てるんじゃない？」
マミの問いにシンジは困ったような表情で答えた。基本的にぎりぎりまで寝ているアスカである。ちなみに本名は惣流・アスカ・ラングレーというが何もどっかの再構成が集まった世界にも同じような人間がいたが関わりはない
「んーおはよー」
噂をすれば何とやら、惣流・アスカ・ラングレー嬢ようやくお目覚めである
「あ、おはようアスカ。ご飯できてるよ」
この家に住んである全員が集まったところで朝ご飯を食べ始めるのだった

～～～

はてさてコウガ達が平和な食卓を囲んでいる頃、特務機関ネルフの発令所は騒然となっていた

「どうなっているの？マヤ！！」

「分かりません！何者かによって警備システムがハックされています！」

唐突にネルフの誇るスーパーコンピューターＭＡＧＩがハッキングを受けたのだ。既にシステムの７割が奪われている

「くっ、ロジックモードに変更して時間を稼いで！」

「だめです！変更できません！！」

「そんな…。日向君！速やかにコウガ君達に連絡を！」

「りょ…了解！！」

リツコはＭＡＧＩを預かる最高責任者として対策を試みるがそんなのはお構いなしにハッキングは進行していく

「メルキオールがリプログラムされました！」

ついにＭＡＧＩを構成する三つのコンピューターのうちの一つが奪われた

『なーんだ、特務機関と聞いたからどれだけのセキュリティを持っているかと思えばザルじゃねえか。つまんねえな』

「「「へ？」」」

いきなりスピーカーから聞こえてきた声に発令所はシンと静まり返る

『こんなので使徒の殲滅とかできるなんて世も末だな…興ざめだ』

「あ…ハッキングがすべて解除されました」

なんとここまでネルフに攻撃をしておいてまさかの試合放棄である。

そして発令所の入り口から堂々と入ってきたのは白衣をきた少年

「こんなんじゃこれの同型機に複数のハッキングを受けたらひとたまりもねえな。おい、構造を教えろ。俺が作り直してやる」

「き…君はいったい…」

発令所に同窓と現れた少年にネルフ副司令冬月コウゾウは尋ねた

「俺か？俺の名は山谷ユキタカだ。覚えておかなくていい。後がめんどくさいからな」
尊大な態度で名乗るユキタカであった。さすがに職員一同唖然呆然である
「門河コウガにあわせろ。俺はやつに用があるんでな」
悪びれもせずに命令口調で話を続けるユキタカ。ふざけるなといいたいところだが相手はＭＡＧＩを完全掌握しかけた人間である。うかつに逆らえない
「それなら大丈夫よ。さっき日向君がコウガ君達に連絡したから」
「オーケー。ならいいだろう」
リツコの言葉に満足したのかユキタカは発令所を出ようとする
「待て！貴様、何が目的だ！」
静観していたゲンドウがユキタカに言い放つ
「聞いてなかったのか？門河コウガにあわせろといったんだ」
「なぜコウガ君にあおうとする！」
「決まってるだろ…？」
ユキタカはゲンドウ問いかけに対してこう言い放った
「俺の知識欲を満たす…ただそれだけだ」
仮にも特務機関の司令に対して尊大に答えるユキタカであった
「それよりもどこか丈夫で広いところに連れて行け」
「えーっとそれじゃあトレーニングルームがありますからそこにいきましょう」
オペレーターの一人である日向マコトはユキタカをトレーニングルームに案内するのだった

～～～

トレーニングルーム
朝食の途中で呼び出しを食らったコウガ達はそれでもなお失火入りと朝食を摂った後、コウガの判断でトレーニングルームにきていた

「ねえコウガ、ここでいいの？」
「ああ。俺の予想が正しければおそらくここに来るだろうな…」
入り口前で仁王立ちするコウガ。なぜかのの背中にはある恐怖の色が見えていた
「ここです…」
「ほー、なかなか広いじゃねえか」
そこにトレーニングルームの扉がひらいて現れたのはユキタカのそれを案内したマコトである
「それでは自分はこれで…」
「まて、戻るついでにここの技術者…いや、技術部の最高責任者を読んでこい」
「は…はい」
発令所に戻ろうとしたマコトを捕まえてさらに一つ指示を飛ばした後ユキタカは唖然としているシンジとアスカを無視してコウガに向き合った
「よう、久しぶりだな」
「俺は永遠にあいたくなかったんですがね…！！」
軽い口調のユキタカに対して投げやりな口調で話すコウガであった
「そういうなって。今回はお前にもきっと利益になるものだから」
そういってユキタカは担いでいたリュックサックをおろすと中からスイッチを取り出した
「アストロスイッチ…」
そう、フォーゼの力となるアストロスイッチだった。現在使用可能なのは1番のロケットから16番のウィンチまで。さらにユキタカが持ってきたのは、17番のフラッシュ、18番のシールド、19番のガトリング、20番のファイヤー、21番のステルス、22番のハンマー、23番のウォーターの合計7個であった
「さてと、さっさとフォーゼに変身しろ。そしてスイッチを試させろ」
「命令形かよ…」

といってもギャラリーもいるし、ここは基本的にプライバシーを守ってくれないことは確かである
「…戦うときに使わせて頂きます」
「今やれ」
「この状況で？」
「…確かに無理か」
ただでさえ、仮面ライダーの存在を知らないシンジとアスカがいるのである。さすがにここで変身するのはまずいだろう
「ならいい。それと、こいつも作ってきた」
「何これ！ハンバーガーセット！？」
ユキタカが取り出したものに興味津々のアスカ。ハンバーガーとポテトフライとドリンクである
「おい、カメラとシザースかせ」
「はいはい」
ユキタカはそんなアスカを無視してコウガにカメラスイッチとシザーススイッチを要求。そして自分の持つフラッシュスイッチをそれぞれハンバーガー、ポテトフライ、ドリンクにセットしてスイッチを入れる。すると…
「何これ！シンジ！見てみて！かわいい！！」
形が変わったのだ
「アストロスイッチの力で偵察などを行う支援メカだ。カメラスイッチを使うバガミールにシザーススイッチを使うポテテョキン、そしてフラッシュスイッチを使うフラシェキーだ」
胸を張って解説するユキタカ。とりあえず役に立ちそうだなと考えつつコウガはトレーニングルームに入ってきた気配に気づいた
「あ、リツコさん」
「あんたがここの技術部の最高責任者か？」
「ええ、そうよ。自己紹介が遅れたわね、赤木リツコよ」
「さっきも名乗ったが改めて、山谷ユキタカだ」
二人の技術者はがっしりと握手をする。その光景を見てコウガは頭

を抱えた
（リツコさんだけでも危険なのに…さらにそれ以上の危険人物が…！しかもその二人が手を組むなんて…！！）
「コウガ、大丈夫？」
「多分…」
さすがにコウガの心配をするシンジであった
「さてと、それでもってさっきコンピューターをハックしたときに情報は閲覧させてもらった。人形決戦兵器人造人間エヴァンゲリオンのパイロットは誰だ？」
「そこにいるわよ。コウガ君もその一人ね。ほら、自己紹介」
「あ、碇シンジです…」
「惣流・アスカ・ラングレーよ」
リツコに促されて自己紹介をするシンジとアスカ。ユキタカはそんな二人を見て一言
「こんな子供が乗ってるのか？」
「ええ。エヴァは子供…しかも１４歳の少年少女しか動かすことができないのよ」
「なるほどな…」
さすがに冷血って訳でもないユキタカである。自分たちよりも年下の少年少女が訳の分からない怪物と戦っているのだからそりゃショックを受けるであろう
「まあでも、あいつよかましか…」
「同意」
ユキタカとコウガの脳裏には共通してある少年の顔が浮かび上がっていたという
「まあ、そんなことはどうでもいい。データによるとＳ２機関だっけか？あの永久機関をプロトタイプの零号機以外に搭載したってなってたが？」
「ええ。そうだけど？」
「あれは理論上ならプロトタイプにも搭載できるようになってた筈

だが？まさか出力を押さえていないとかないだろうな？」
「ちょっと待って、なんであなたがそんなことを知っているの？」
「それは…」
ユキタカとリツコの会話にコウガが割り込んだ
「その人が、何やらいろいろな兵器や武装。それにＳ２機関の理論を構築した人間ですよ」
「それ本当なの？コウガ」
「嘘は言わない」
コウガの発言にシンジは恐る恐る尋ねるが、コウガはまるで諦めたかのような口調で返した
「ということは、あのヘルメットとかも？」
「ああ」
アスカも恐る恐るコウガに尋ねる。コウガはそれに即答した
「あんな簡単な理論が分からないなんでバカだな。という訳だ。俺の観点から言わせてもらうがまだあれの出力は押さえられる」
「そうなの？」
「ついでだからいろいろやってやる。技術部を全員集めろ、俺が直々に指導してやる」
「わかったわ」
ユキタカはそう言った後コウガ達に言う
「お前ら、学校はいいのか？」
「あー、そうだった」
珍しく真面目なことを言ったユキタカ。コウガは曖昧に返事をした
後シンジとアスカにこういう
「とりあえず行くか。マミやレイも心配してるだろうしな」
「だね。ほらアスカも。いつまで戯れてるの？」
「はーい」
コウガ、シンジ、アスカはトレーニングルームから出て行いった
「だてと、俺としては１週間以内に零号機へのＳ２機関の実装と大

気圏外戦闘用装備及び対空中戦闘用装備を完成・実装させたいんでな。きりきり動けよ」

ユキタカ主導のもとネルフ技術部の大改革が始まったのだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2504y/

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ＆OOO&

2011年12月20日01時48分発行